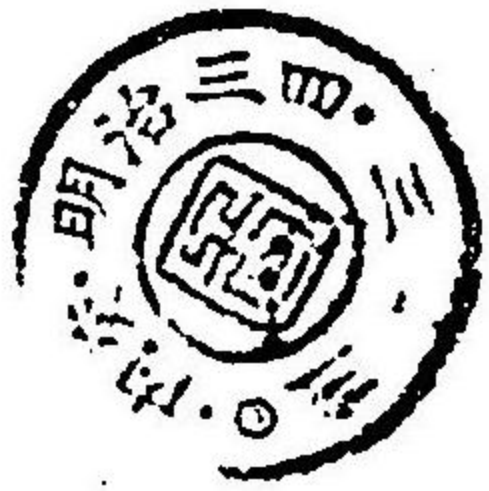


IT-2T-86

矢津昌永著



日本政治地理

東京 丸善株式會社

90
103

日本政治地理自序

回顧スレバ既ニ殆ト十年ニナリヌ。余ハ日本帝國政治地理ヲ著ハンテ世ニ質セシガ。其比類多カラサル書ナリシヲ以テ。版ヲ重ヌル數回ニ及ビ。尙續々需用アリシモ。該書ノ如キ國勢ヲ現ハスベキ書ノ舊版ハ。却テ讀者ヲ誤ルノ恐レアルヲ以テ。斷然絶版シタリ。爾來國運ノ隆興ト。社會ノ進歩トハ。我帝國ノ現狀及國勢ヲ知ラントスルノ望ハ。益切ナルニ拘ラズ。之レニ關スル著述ハ今尙殆ト皆無ナリ。故テ以テ余ニ再ビ政治地理ノ編著ヲ促スコト頗ル急ナリ。是レ更ニ此著アル所以ナリ。

政治地理トハ世ニ人文地理。人事地理。若クハ邦制地理等

ト稱セラル、モノニシテ。總テ地ト人トノ間ニ起ル現象ヲ説クモノナリ。而シテ本書ハ特殊ナル我帝國ノ組織。我國民及其性格風習。政治機關ノ組織運用。經濟及財政。交通機關ノ發達。國民ノ生業及富源等。主トシテ立憲國民トシテ知ラザルベカラザル事項ヲ記シタルバ。或ハ之ヲ國民科用書ト稱スルモ可ナラン乎。要ハ之ニ依リテ。我中流國民ノ資格ヲ養成セントス。

我國近今ノ發達進歩ハ。皆人ノ稱フル所ナレドモ。其進程如何ハ事實ニ據リテ知ラザルベカラズ。茲ニ前著ト比較シテ。過去十年間ニ於ケル。我國進歩ノ狀ヲ特筆シテ。卷首ニ表セントス。

先ツ帝國版圖ノ擴張ヲ示セバ。我版圖ノ極西ハ東經百二十二度四十五分ナリシガ。今ハ東經百十九度二十分迄ニ進ミ。極南ハ北緯二十六度五十分ヨリ。北緯二十一度四十八分ニ擴張セリ。故ニ經度ニ於テハ三度二十五分西ニ緯度ニ於テハ五度二分(三百分十)南ニ膨脹セリ。故ニ其結果國土ノ面積ニ於テハ二萬四千八百方里ヨリ。二萬七千方里(百分ノ九強ノ増加)トナレリ。

人口ハ四千萬ヨリ四千七百萬(百分ノ九弱)ニ増加シ。普通教育ニ於テハ。學齡百分中就學四十八ヨリ六十七(七割)ニ進ミ。陸軍ハ七個師團ヨリ十三個師團ニ。軍艦ハ五萬八千噸ヨリ二十五萬噸(四倍)ニ達セリ。歲入ハ八千三百萬

圓ヨリ二億五千萬圓^(三)トナリ。又富ノ度ハ所得納稅額百戸ニ付十三圓五十錢ヨリ三十二圓^(三)トナレリ。交通運輸ニ關シテハ鐵道延長ハ一千四百五十哩ヨリ三千七百哩^(五)トナリ。郵便物ハ一人ニ付五個ヨリ十四個^(四)ニ。電報ハ百人ニ付六個ヨリ二十七個^(四)トナリ。海運ハ商船十萬噸ヨリ五十一萬噸^(五)トナレリ。生産力ニ於テモ著シク進步シ總生産額九億八千萬圓ヨリ十六億二千萬圓^(六)トナレリ。其内農産物ハ七億圓ヨリ十億二千萬圓^(五)トナリ。工業産物ハ二億五千萬圓ヨリ五億七千萬圓^(三)ニ達シ。水産物ハ二千萬圓ヨリ九千萬圓^(五)ニ進ミ。鑛産物ハ一千三百五十萬圓ヨリ

四千萬圓^(三)トナレリ。又貿易額ハ一億四千二百萬圓ヨリ四億九千萬圓^(四)ニ進メリ。以上ノ外數字ヲ以テ現ハスベカラザル發達進步ハ尙甚ダ多シ。嗚呼斯ノ如キ國運日昇ノ皇威ノ下ニ在ル吾人ノ幸福夫レ將タ如何ソヤ。讀者希クハ本書ノ内容ニ就キ其發達進步ノ狀果シテ如何ナルベキ歟。請フ之ヲ繙キテ我國勢ノ要領ヲ知レ之ヲ序トナス。

紀元二千五百六十一年春

矢津昌 永識

日本政治地理目次

總論	一頁
第一編	八
國土	八
帝國の創建及沿革	八
國の位置	一七
國の幅員	二八
第二編	三四
人民	三四
社會	三四
種族	三九
族制	四五

人口

人口統計、人口沿革、男女比較、人口配布

四八

人情

七三

風俗

八九

宗教

一〇二

教育

一一五

衛生

一二四

日本人の體格

第三編

一三三

邦制

一三三

國家

一三三

國體

一三五

皇室

政體

一三九

憲法

立法制

一四七

參政權、政黨政派

行政制

一五五

司法制

一六〇

國防軍制

一六二

陸軍、海軍

地方自治制

一八〇

市町村制、郡制、府縣

第四編

二〇〇

經濟

二〇〇

財政

二〇〇

納稅義務 租稅 歲出入 納稅額の配布	二〇七
國債	二〇八
貨幣	二〇八
富の配布	二二二
所得稅額 富豪 貯蓄	二二三
第五編	二二三
交通	二二三
交通の發達	二二三
道路及車	二二七
鐵道	二三三
郵便	二三七
電信	二四二
電話	二四五

海運	二四八
第六編	二五七
生業及物産	二五七
農業及農産物	二六一
土地 農業者 農産物 食用農産物 工業用農産物	二六一
牧畜	二八七
林業及林産	二九一
漁業及水産	二九五
鑛業及鑛産物	三〇五
工業及工藝品	三一五
織物 紡績 陶磁器 醸造 漆器其他 工業地	三一五
商業	三三四
第七編	三四一

外交

三四一

各條約國との修交

三四二

貿易

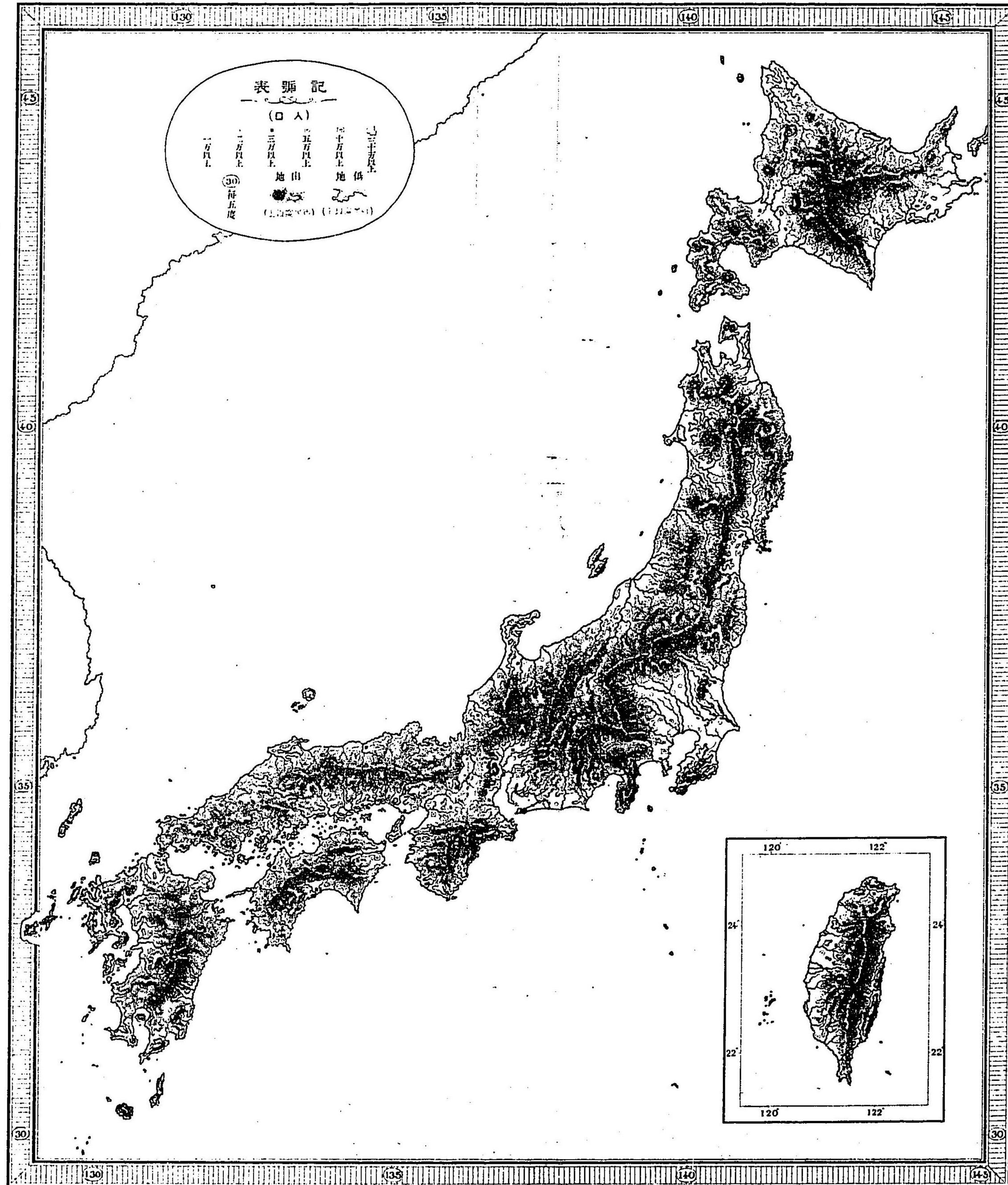
三五四

輸出入額、輸出入品、貿易國別、貿易港

日本政治地理目次了

大日本帝國地形圖

【各部比例尺不同 地圖之定規】



記號表

(口人)

●	二十萬以上	○	山地
●	十萬以上	○	山地
●	五萬以上	○	山地
●	三萬以上	○	山地
●	一萬以上	○	山地
○	一萬以下	○	山地

(注) 山地 (注) 山地



日本政治地理

矢津昌永著

總論

政治地理は地球を以て吾人人類の社會又は國家として諸種の配置を講究する學科なり。之を詳言すれば地理的形狀が人類の各般に對する關係、即ち人類の政治上には如何に風土的關係あるや、人類の社會上には如何に地理的現象の影響あるや、若くは人類生業上の動作競逐と自然形勢との間に存する交渉は如何、又は如何なりしやを闡開するにあり。故に政治地理は之を歴史的、人類的、及産業的諸點より觀察し講究し、而して之を綜合するにあり。

政治地理の
定義

政治地理の
究の方面

抑、歴史に地理の關係あるとは世人の一般に認識する所なれども、主に史學的より地理を應用したるものにして、地理學上より歴史を講究したるもの少し、故に其準據頗る空漠にして考證不充分たるを免れず、蓋し人類史乘の事實は皆人類と場所との間に起るものにして、即ち人類が此地球上を以て活劇場となし、營作競争せる結果に外ならず、故に其場所たる地球即ち地理的と分離するときは如何ぞ正當なる事蹟を追究することを得んや、故に曰く、地を離れて人なしと又、人を離れて事なしと

凡そ一國民は必ず是が歴史を有す、而して其史上の變遷發達に至りては、各地各様にして一も同じきこと能はざる所以のものは如何、試に此疑問を將て、各地の山岳、河流、平原、湖

沼、森林等に就き之を見るべし、其大體の形勢に於ては著しき差異なきが如しと雖も、些細に之を察相すれば千様萬態殆ど極りなき種々の形狀あるとを發見すべし、則ち此特異なる形狀こそ各國史乘に現はるゝ特異の變遷發達を來せる要素なりと謂ふべし、例へば或る風土の關係は其社會及政治の發達を幫助誘掖せし原因となりしこともあらん、或る天然の形勢は英雄豪族の遠征に通路の便を與へ、其統一の偉業を翼賛せしこともあるべく、又は反りて之を障害し、到底鴻圖を完ふすること能はざるが如きものもあらん、或は通商貿易の發達せしは其海陸の配置に基きしこともあるべく、或は文學宗教の特異なるは國土固有の風景自ら然らしめし事もあらん、尙此觀察法を以て、歷史上の基原とな

るべき都會村落等の成立に就て之を視れば、何故に或る一小部に限り特に人口輻湊し、繁榮を競ふに至りしや、其由來を原ぬれば必ず河道便宜の地にあらざれば、四望開達の平原又は泉地、翠境にあり、否らざれば特種の産業に適應する土地に限るが如き、皆悉く地理的事情に支配せられざるもの鮮し、總して邦國の變遷發達は、以上の如き複雑なる天然の模型により、陶冶されたるものなれば、此模型如何の講究を経ざれば、一國の變遷は追想すると能はざるなり、故に曰く、地學は史學の物理的基礎にして、又人生活動の物理的基礎なりと。

人類と地理
の關係

政治地理の人類に就き講究する點亦頗る多し、今各國の住民に就て之を觀れば、其人種、種族、言語、風俗、習慣等各々別あ

四

生産物と
地理の關係

り、而して此等の各民も最初は同一祖先なりしならん、然れども現今に至りては一見其殊別を辨ずるに至りしものは、主として風土的事情に支配せられたるに因らざればならず、例へば氣候に應ずる食品の種類、衣服の需用、家屋の構造等より襲受する地方的異風、或は體格の發育、皮膚の色素に及ぼす温度の勢力等、一として地理的によりして定らざるものなし、其他言語、氣質、習慣等は尙一層周圍の地理情況によりて涵養せらるゝとは實例に徴して明なり。

産業は國家發達の要素なり、而して天産物と人造品とを論ぜず、其原料は悉く之を地理的範圍内に仰がざるべからず、是を以て動植物及礦物の風土的配置を講究して移住地を撰定し、通商運輸の便否を審査して人口の輻湊地を指定す

るが如き、經世上實に須要の事たり。抑、人生の需用は衣食住より急なるはなし而して之を覓むるの手段を職業と云ふ、故に職業は必ず其地天與の生産豊富なる物料に傾向するものなり、例へば森林地方には林業者を生し、肥沃の冲積地には農業者多く、濱海の地には海業者多く、鑛物豊なる地には鑛業者集まるが如く、自ら生業の配布なるものを生ず、而して各自使用して餘裕ある物品は、他の須要なる物品と交換せんとする願望を生じ、爰に初めて通商貿易の道起るに至るべし、國運は斯くの如くして漸次發達するを以て、政治地理としては必ず各種生産物の配置、品質の良否、産額の多寡、其製出せらるゝ総ての情况より、運搬の便否、販路及此情况に圍繞せらるゝ人民の種類、状態等をも講究せざるべからず。

らず。

之を要するに政治地理の範圍及任務は、地理的事情に支配せらるゝ、國家の變遷發達及住民の品質習俗、生業産物の配置等を説き以て經世上須要の事理を講究するにあり、而して常に此地球を以て人類の生活場となし、地球表面に於ける天然の状態が人類を圍繞する風土的境遇と看做し、吾人類を以て中心とし、根本として講究する所の學科なりとす。

第一編

國土

帝國の創建及沿革

帝國の始原
大八島

抑、我帝國統治の基源を原ぬるに、皇祖伊弉諾冊尊、伊弉册尊の二柱神、中部なる八犬島を發見し給ひしより、既に「大八島」若くは「大八洲」の稱呼ありし、所謂大八島とは(一)御子淡道ノ島(淡路)(二)伊余ノ二名島(四國島)(三)隱岐ノ三子島(隱岐島)(四)筑紫島(九州島)(五)伊岐島(壹岐島)(六)津島(對馬)(七)佐度ノ島(佐渡島)(八)大倭豐秋津島(本州)の八島を總稱して大八島國と謂へり。而して此等の諸島には既に先住の人民ありて之を領したりしが、二柱神の此諸島を創創し給ひしとき、争ふて來服せ

瑞穂國

しかば、各、舊來の首長たる國神に委して之を治めしめられたり。

二柱神の御子、天照太神に至り、其御孫瓊々杵尊をして豐蘆原の瑞穂國を「知さしめられたり、是を以て尊、吾田の笠狹岬(今の薩摩加世田港と云)を大都と定められたり、是に於て我國運は稍進歩し、八島を總稱するに豐蘆原瑞穂國と云ひ、之を統治するに瓊々杵尊ありて首府を笠狹岬に置かれしなり、然れども其時までは固より統一の大業成りしにあらで、各部落の酋長等は權力頗る強くして、所謂邑に君あり、村に長あるの勢にして、皇化の及ぶ所狭かりし、其後數代は只日向の高千穂に都し給ふのみなりき。

神武天皇に至り、國家統一の大志を抱き給ひ、遂に高千穂を

神武東征

出て、東征の途に上られたり、抑、天皇は我國土の趣により、水路の便に依るの容易なるべきを明察し給ひ、先づ舟師を日向海岸より發し、瀬戸内海に入り、其沿岸各地の土蠻を征服し、遂に大和に入り、創業八年にして中州を平定せられ、大鼎を倭の檀原に定め、國家經營の基を開き給へり、天皇既に檀原に奠鼎せられ、我邦土の形狀を望み給ひ、『あきつ(蛤)のとなめ(蛤)せるがごとし』と誥せしより、我邦を蜻蛉洲、或は國音により秋津洲と稱するに至れり、而して各地方を治むるには國及縣の區畫あり、國造、縣主等の官を置かれ、地方政治も粗、其緒に就けり、是れを皇化東遷の第一段とす。

國の創置

其後各地方の國名も次第に起れり、即ち筑紫島にては其南を襲國と云ひ、東岸は日向の國と稱し、西岸を火の國と呼ひ、

東北部は豊の國と總稱したり、又四國島は既に伊余、土左、粟、讚吉の四部に分れたり、中國にては今の長門の邊は空門と稱し、其東には周芳、阿岐、出雲、吉備、伯岐、稻葉、多遲摩、田庭等ありき、又今の大阪四近は難波と總稱し、近畿は中央地なれば皇化も行はれ、地名も甚だ多く、國名には山背、倭、河内、伊勢の稱あり、近畿以東は皇化洽からざりしを以て地名も漸く太平洋岸に、遠江、日本海岸に、越の國、中部に、科野、關東に、牟邪志、房總半島を總の國と概稱するに過ぎざりし、而して其東は只陸の奥と汎稱するに止れり、以上の地名は皆廣き概稱にして、其餘の國々は總て百三十五國ありし、而して之を率ゆるは倭檀原の中央府なれば、倭なる名稱は、中央を意味し、之に太の字を冠して、大倭とは本邦を汎稱することゝなれり。

神武天皇の創業後は久しく舊來の姿となりしが、第十代崇神天皇に至りて、邊隅の皇化に沾はざるを憂ひ給ひ、四道將軍を置き、各地主任の巡撫を定め、北陸、東海、西の道、丹波道に遣され、大に統治權の及ぶ區域を擴張せられたりき、第十二代景行天皇に至り、西の方筑紫を親征せられ、皇子小碓尊をして東方を征せしめ、大に治域を東進せしめられたり、成務天皇に至りては、小碓皇子東征の結果として、政治區畫は大に發達し、始めて天然の指定せる山河の形勢に従ひ、國境なるものを劃して、國名を附せられ、東は陸の奥に至るまで、國の區畫大に定まれり、其後分合廢置等のことありしが、推古天皇に至りては、其區畫今の國名と大畧異なる所なく、只、異なる處は陸の奥、及出羽二國の區畫なく、又今の安房、能登、志

摩、伊賀、加賀、和泉、丹後、美作、大隅の九國は未だなかりしのみ、齋明天皇に至り、大に帝國の版圖を東に擴め、始めて本州を踰へて蝦夷島に皇化浸漸するの期に至れり、即ち天皇の四年、越後の國司阿部の比羅夫、今の兩羽地方を戡定し、遂に津輕海峽を渡りて、始めて蝦夷に入り、渡島、蝦夷を征し、翌年再び同島の北半を征服し、後方羊蹄郡を置けり、是れ蝦夷經畧の第一着手とす。

内地に於ける國の廢置は、天武天皇の時、伊勢を割て伊賀を、駿河を割て伊豆を、置けり、此頃より東海、東山等の道名起れり、文武天皇の時、始めて出羽國を置き、又日向を割て大隅を、丹波を割て丹後を、備前を割て美作を、置かれたり、此時に至り、畿内七道の稱始めて定まれり、元正天皇の時、河内を割て

和泉を、越前を割て能登を、上總を割て安房を、陸奥の内に石
城、石脊（此二國後廢す）の兩國を、伊勢を割て志摩を置かれたり、孝謙
天皇の時大倭を改めて大和國とし、攝津職を改めて國とし、
嵯峨天皇の時越前を割て加賀の國を置かれたり、是に至り
維新前まで唱へ來りし六十六國の名及境域定まるに至れ
り。

首府移遷

中央府は神武天皇に至り、倭橿原に帝都を定め給しも、其後
御代の更る毎に、帝都も亦概ね移されたり、然れども大和は
近畿諸國を制御するに最も便利なる形勢を有せしを以て、
二三の例を除く外は多くは大和高原中に帝都を置かれた
り、元明天皇に至り大和の奈良を撰定して宮室を經營し都
を移されしより、始めて七代の間爰に都し給ふことゝなれ

維新の詔

り、桓武天皇に至りては大和高原の到底日本全國を制御す
るの地にあらざるを看破し給ひ、我邦の中央にして而も交
通の便ある山城の地を相して大に皇居を經營し遷都せら
れたりき、是れ即ち京都にして遂に明治維新まで代々都し
給ひたり、是を皇化東遷の第二段とす。

維新の始めに至りて陸奥を磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥の五國
に分ち、出羽を羽前、羽後の兩國に分たれたり、然るに蝦夷島
は比羅夫の征畧後は内地の多事に追はれて久しく經營の
違なかりしが、後花園天皇の時若狹の人武田信廣等の經畧
によりて漸く全島を戡定したり、明治二年全島及千島を合
せて北海道と稱し更に十一國に分ち爰に全く畿内八道八
十五國とはなれり而して京都は帝國の首府たる便宜の地

北海道

臺灣の割譲を受く

にあらざるを以て都を江戸に遷して東京と改稱せられたり是れ皇化東遷の第三段とす。

又明治二十七八年に至り空前の偉功を奏し清國より臺灣の割譲を受けて我版圖に入れこゝに總督府を置き日本版圖大に西南部に擴張せり。

國、藩、府、縣の變遷

國なる區畫は元と政治的區畫なりしが封建の政始まりて以來豪族の大なる者は數國を領し小なるものは一國を數個に分割して治域と定めたるを以て國は遂に政治區畫の性質を失ふに至れり徳川氏の時に及びては別に藩と稱する政治區畫ありて維新の際には凡そ二百七十一藩ありしが明治四年に至り藩を廢して府縣に改め府を置く三縣を置く六十なりしが其後廢置分合ありて今は三府四十九縣

國の位置

あり之を我地方行政區畫とす此區畫は大小同しからず大は八百九十九方里(岩手縣)小は五十二方里(東京府)の間にあれども平均は四百〇八方里とす以上を我邦に於ける地理的沿革の大畧とす。

國の位置

國の位置なるものは人力の及ばざる先天的配布にして位置の如何は何物も之を左右すること能はずされば現に地球上の各地に文野の相違あるものは其第一の原因として其地の位置を擧げざるべからず而して其位置の國家發達に及ぼすべきもの下の三要項あり(一)海陸の配布に對する位置(二)氣候に對する位置(三)國際上の位置是なり。

海岸線

島國

半島國

(一)海陸の配布に對する位置。國の發達に要する位置は、成べく長く海に濱せざるべからず、故に島國、半島國は發達に對し第一の便益を有す、又海灣の浸入多くして海岸線に富める處は發達に適する地位なり、抑海は交通運輸に便にして古より國家の發達に要する原素は必ず海を渡りて是より彼れに互に相來往するものなれば四面に海を受けて海路の要衝を占むる島國は最も優勝の地位とす、是を以て島國は内地よりも其發達必ず數等の上にあるを常とす、亞細亞に於ける日本、歐洲に於ける英國、阿非利加に於けるマダガスカルの如き是なり、之に亞きて半島國は同じ原因によりて其發達又速なり、上古に於ける印度、亞刺比亞、希臘、羅馬の發達せるが如き是なり、次に海岸線は海に縁あるものな

れば海岸線延長の長短は直に其地の文野を卜するの材料となるべし、左の各大洲面積と海岸線との比較を見れば大洲の如き大體にありても尙此原因に支配せらるゝを知るべし。

(1) 歐羅巴	面積百四十三方哩 = 付	海岸線一哩
(2) 北亞米利加	同二百六十五方哩 = 付	同 一哩
(3) 濠斯太利亞	同三百三十方哩 = 付	同 一哩
(4) 南亞米利加	同四百三十四方哩 = 付	同 一哩
(5) 亞細亞	同四百六十九方哩 = 付	同 一哩
(6) 阿非利加	同八百九十六方哩 = 付	同 一哩

是を以て大陸内地に在りて海を有せざる地は野蠻の狀態にありて數千年來曾て其狀況の異なることなく、昔日水草

大陸内地の不發達

を逐ふて家畜と共に移轉し帳幕を家としたる野民は今日も尙其舊態を脱すること能はずよし或る原因によりて一時發達するの觀をなす者なきにあらざるも忽ち沈滅すること恰も野火の其曠原を焼くが如く再び舊態に復するを常とす今我日本が海陸の配布に對する位置を見るに總て最優勝の位置にあり第一四面環海の島國にして近く大陸を控へ海路交通の便を占めたり又海岸線の出入は甚だ多く港灣到る處に存す之を面積に比すれば二萬七千六十二方里の面積にして海岸線の延長は七千四百六十七里あり故に僅に三方里六に付海岸線一里(八方哩に付一哩)を有せり斯の如きは世界中其比を見る稀なり。

(二)氣候に對する位置 氣候の如何は人の抵抗し得ざる天

日本國の位置
日本の海岸線

氣候上の位置

世界文化の
北極

緯度と文化

然力なり故に氣候の適當なる地を占むる國と寒暑の酷烈なる國とは其發達に於て天淵の相違あり人文の發達は實に氣候に支配せらるゝこと深し歴史上に徴して古來地球上開化の變遷を見るに世の文化は南部より次第に北部に變遷するの傾向あり是れ全く氣候に對する位置の然らしむる處なり今其例證を示さんに凡そ一時代間に於ける開化は概ね同緯度内に行はる先づ上古世界の文化は北緯二十度より三十度の内に行はれたり即ち東部にありては支那の紅江畔中央に於ては印度波斯西部に於てはメソポタミヤ及埃及等の發達を見たり又中古に遷れば世界の文化は北に進むこと凡そ十五緯度にして北緯三十五度乃至四十五度の並行線内にあり支那に於ては楊子江畔の發達と

なり。西部にありては希臘、羅馬、西班牙、葡萄牙等の半島國に遷りたり。而して近今に至りては世界の文化は尙北漸すること。十緯度にして北緯四十五度乃至五十五度の同緯度内に遷り、歐洲の西北部、北米合衆國の如きは現時の開化國となれり。

文化北漸の理由

斯く文化が次第に北に進む所以は一に氣候の影響にして、上古の人民にありては天然力(特に氣候)を制する力薄弱なれば、此等人民の發育に適する所は寒地にあらずして暖地であり、暖地は食品の得易きと衣服住家の氣候に堪へ易きこと遙に寒地に勝れり。是を以て世界の發達は先づ通じて南部の暖地より始まるものなり。併しながら暖地の發達するは生活の簡單なる間にして世の競争漸く進み其場裏に入り

て大に進歩せんには暖地の適當ならざるを發見すべし。働作勤勉の寒地に適すること、智慮徳義の啓發に暖熱の不適當なること等より、文化は次第に北漸して南部は遂に振はざるに至る故に或時代の文化が同緯度内に行はると云へるは、即ち同温線内に行はるゝの謂にして、上古の文化は華氏八十度乃至七十度の同温線内に行はれ、中古の開化は七十度乃至六十度までの同温線内となり、近今の開化は六十度乃至五十度の同温線内となれり。故に現時氣候に對する最良の位置は華氏六十度乃至五十度の同温線内と云ふべし。

日本の緯度

我日本の位置を観るに北緯二十一度五十四分より起り同五十度五十六分に至る、是を以て緯度に於ては上古より世

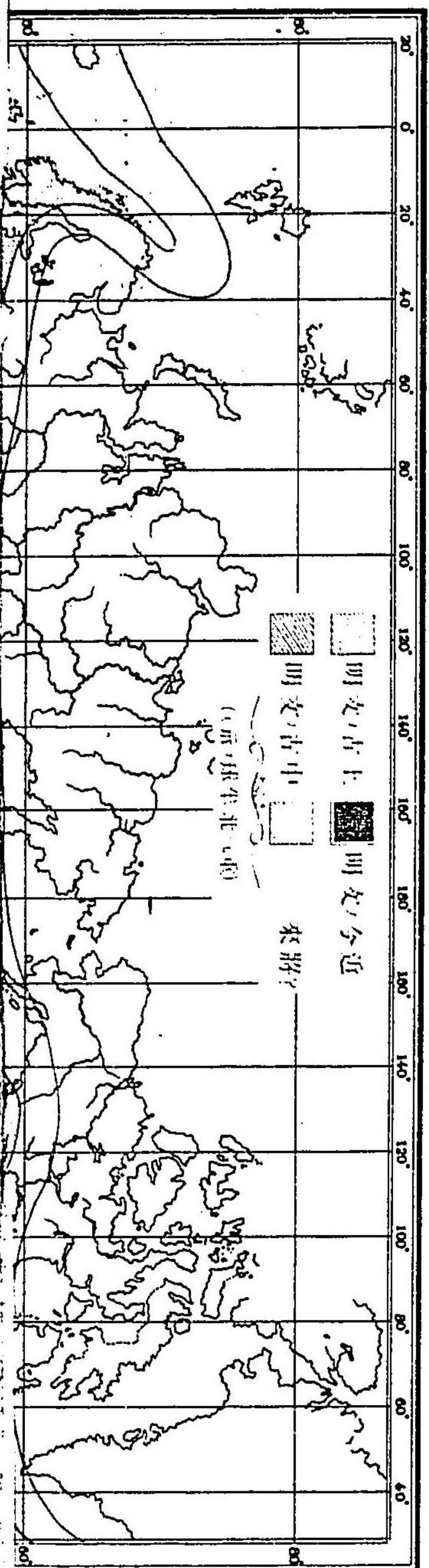
界が經過したる開化の總ての緯度を通じたり、即ち緯度に對する世界開化の位置の全部を占めたり、然れども我國の氣候は他の同緯度の地に比すれば稍、寒冷にして同溫線は九州南部の^{三十三}度より北海道北端の^{四十}度の間にあり、されば同溫線より言へば九州の最南端より以北本州の北端までは恰も近今の開明地に適當なる位置を占めたり、又以北、北海道の新野は將來に屬すべき多望の位置にあり、

(位置に於ける文明圖參看)

(三) 國際上の位置 國と國と交際する上に就て優勝の位置は國際上起り易き不利の交渉を避くべきと同時に、進歩發達に要する利益は妨げなく之を受くべき位置を占めざるべからず、斯の如き處は只之を島國に於てのみ求むべきな

位置と外交

圖布配之明文ルケ於ニ置位



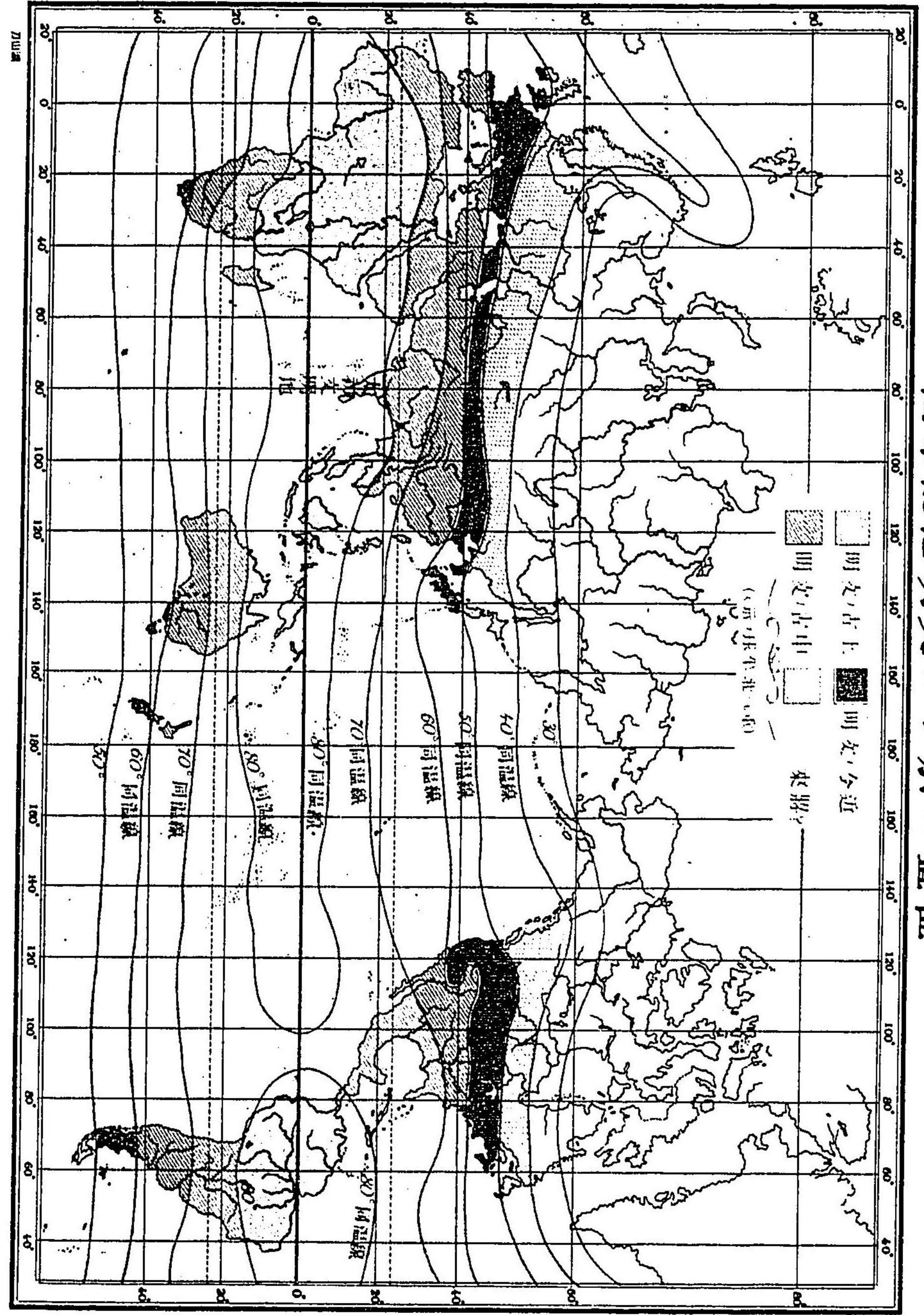
界が經過したる開化の總ての緯度を通じたり、即ち緯度に對する世界開化の位置の全部を占めたり、然れども我國の氣候は他の同緯度の地に比すれば稍、寒冷にして同溫線は九州南部の三十三度より北海道北端の四十度の間にあり、されば同溫線より言へば九州の最南端より以北本州の北端までは恰も近今の開明地に適當なる位置を占めたり、又以北、北海道の新野は將來に屬すべき多望の位置にあり。

(位置に於ける文明圖參看)

三國際上の位置 國と國と交際する上に就て優勝の位置は、國際上起り易き不利の交渉を避くべきと同時に、進歩發達に要する利益は妨げなく之を受くべき位置を占めざるべからず。斯の如き處は只之を島國に於てのみ求むべきな

位置と外交

圖布配之明文ルケ於ニ置位



り、次に説く我國の位置を見るべし。

若し我國土と亞細亞大陸間の土地の陷没カクボツをして後世に起らしめ、日本は大陸と陸續し、信濃川をして黒龍江の支流たらしめ、富士山をして崑崙連脈の一峯たらしめなば如何、我國の歴史は必ず古來數多の今と異なる事蹟を留めしならん、或る時は我版圖大に擴張せしこともあらん、或る時は著しく收縮せしこともあらん、然れども要するに亞細亞大陸は相變らず今の亞細亞大陸にして、彼の大陸各地の現狀に照らし鑑みれば、其陸續きたる我國情も亦如何あるべきやと察するに難からざるべし、然るに我國の大初より特に尊嚴にして強盛なる獨立帝國を成せるものは全く我位置の大陸と海水を以て隔絶し、國際上利害拒受の權を有す

る。島國なるによれり。蓋し彼の歐洲にありては英國の位置は酷だ我と相似たり而して其國際上歐洲大陸に起りし事件が如何に英國に影響を及ぼせしかの事例を見るべし、英國が古來大陸各國の間に屢起れる境界上の爭端或は野望家の企になれる無名の戰爭等總て不利なる影響を被りしこと少なかりしは全く大陸と一海峽を隔てたるによる之に反して大陸に起りたる文學技術及發明の如き無形上の利益は直に海峽を渡り來りて大に英國の發達を助けたり、我國も亦之と同じ、古より亞細亞大陸には慘毒なる戰爭畧奪等殺風吹き荒みたるにも拘はらず、我歴史に其影響を留るものは實に少かりし而して文學工藝其他の事業は海を渡りて輸入し我開化を促せしもの多かりしは余の言を俟

たさる所なり。

無形風化の
渡來

總て國際的交渉は境界相接するより起るを常とす、然るに天然の障害之に横はる時は容易に之に抵抗すること能はざるに反して、無形の風化は其渡來に於て一海峽何の妨げあらんや、文明同化の風は常に吹て絶えず加ふるに國民の之を歓迎するに於ては其萃を抜くに於ても亦一の故障なく駸々として輸入するは地を同ふするに異ならず、然るに獨り奈何せん亞細亞大陸の開明せし支那の如きは、其大部の地位は北緯二十度乃至三十五度にあるを以て、既に過去の發達に屬し、最早我邦の發達に資するの價值なく、隨て我邦も亦大陸と共に久しく踟躕の姿に陥りたりしが、一旦國を開きて歐米の新元素を輸入するや地理上の位置は忽ち

日本の新發

他に優りたる本色を現はし來れること例へば沮まれたる水の一時に決潰せるが如く其進歩の速なること世界に其比を見ざるに至れること實に偶然と謂ふべからず。

國土の幅員

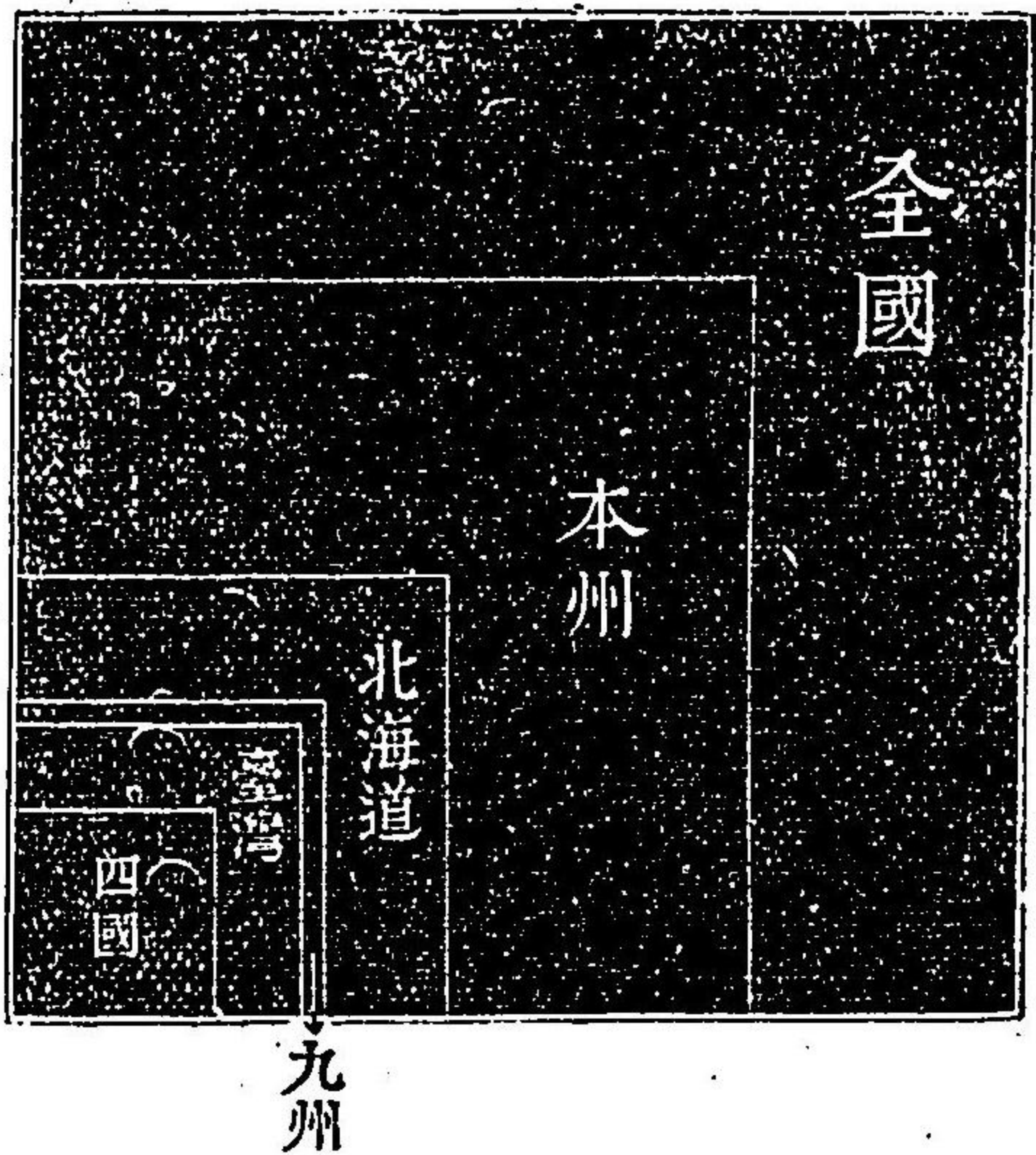
國家の二大要素
土地の面積

土地人民は國家の二大要素なり、されば國土幅員の廣袤は國力の一なり。我日本の面積は二萬七千六十二方里(十六萬一哩四方)を有し、全地球陸面の約三百七十分の一を占め、亞細亞全洲の百分の一を領せり、而して各土地の面積別左の如し。

- 本州並屬島面積 一、四五七一方里一二
- 北海道本地面積 五〇六一方里九〇
- 九州面積 二六一七方里五四
- 臺灣面積 二二五九方里九〇

- 四國面積 一一八〇方里六七
- 千島諸島面積 一〇三三方里四六
- 琉球諸島面積 一五六方里九一
- 其他諸島面積 一七二方里七六
- 總計 二七〇六一方里九三

面積比較圖



各島	面積	全國の百分率
本州	五三八四	九六七
北海道	一八七〇	四三九
九州	二六一七	八三五
四國	一一八〇	
臺灣	二二五九	

右各土地の面積を百分比例によりて示せば、本州は全國の

ASIA.		EUROPE.	
Nippon Empire1.	Russia	15,3
Asiatic Russia	38,2	Austro-Hungary	1,64
China	30,7	German Empire	1,43
British India	12,7	France	1,4-
Arabia	8,1-	Balkan States	1,36
Asiatic Turkey	4,5+	Spain	1,24
Persia	3,8-	Sweden Norway	1,96
Afghanistan	2,1	Great Britania and Ireland,	82
French Indo-China	1,5-	Italy	,77
Siam	1,2+	Portugal	,24
Corea	5,3-	Holland	,14
		Greece	,14-
		Switzerland	,10
		Denmark	,09
		Belgium	,07

國の強弱は
必ずしも
大小に
關せず

五十三分八四なれば全國の過半を領せり、北海道は全國の十八分七にして本州とは殆ど三と一との比に當れり、又九州は全國の九分六七にして本州の五分の一餘なり、故に北海道と殆ど二と一との比なり、而して四國は全國の四分三九にして之を二倍すれば九州より稍小に之を四倍すれば殆ど北海道に匹敵すべし、而して臺灣は全國の八分三五にして九州に亞ぎ其弟島と云ふべく殆ど四國島の二倍に均し、今我國面積を單位とし亞細亞及歐羅巴各邦とを比較すれば左の如し十符は強一符は弱を示す

此比較によりて見れば我邦の面積は亞細亞にありては第十位にありて小國と謂ふべし、然れども之を歐洲に比すれば第八位にあり我より小なるもの八國なれば中國と稱す

領海面積

べし、既に述ぶるが如く國土の大小は國力の一なれども徒に大なるを以て優勝なりと謂ふべからず、其優劣は國內諸種の地理的に關すること亞細亞諸邦の大にして歐洲各國の小なるも其富強の實に至りては同日の談にあらざるが如し、特に我國の如き島國は大陸諸邦と異にして陸土の面積は狭小なれども、富源限りなき領海の面積は實に莫大のものなり、今日の國際法によれば國の領海は其海岸より三哩以内とす之に據るも我國の如きは陸土の外尙ほ二萬一千餘方里即ち殆と陸土と匹敵すべき面積あり、況んや富源に供用すべき海面は只三哩のみに限るにあらず、茫々たる蒼海は採りて禁ずることなく、用ゐて盡ることなき大海原は亦幾十萬方里なるを知らざれば、國土狹小なるは以て憂

となすに足らず、海國人は海を顧みざるべからず、陸土の生産力よりも海水の生産力に富めるは實驗の成績によりて明なり、故に海國人は大に海を顧みざるべからず。

第二編

人民

社會

社會の結合

社會は人民の定住によりて初めて成形す。即ち人類の相結合したる一の團體にして、協同心を以て第一の要素とす。故に人々食料を得んが爲め團結して獸類を追ひ、或は協力して敵を防禦するが如きは社會結合の始めなり。而して社會の漸次發達すると否らざるとは天然のと人類の如何による、則ち其土地の位置及形勢氣候天産物の多少等(天然の)又は其種族、體質の強弱性情の如何(人類の)等によるなり。今社會の發達に適する各原由を記すれば、天然のありて

日本の天然

は先づ土地の位置は温帯に位して海に遠からず、交通自在にして氣候快美に、地勢は種々に分れ、人力を加ふれば有用となるべき天産の原料、特に鑛物に富まざるべからず。又人類のありては、住民の體質強壯にして久しく勞に堪へ能く、外界の事物を制するの能力を有し、協同心力して事に従ふの義氣なかるべからず。我國の天然の事情は既に述ぶるが如く、國土の位置は亞細亞東邊の島國にして自在に其四圍を廻航すべく、氣候は世界中最も快美なる温帯を占め、夏期に至るも南部は攝氏三十五度、北部は十八九度にして固より業を廢するに至らず、冬期は五六度より氷點下七八度にして、人を傷害することなし。地勢は種々に區劃せられ、天然の生産物概ね具備せ

日本的人類

ざる物なし。

次に我國の人類的に就て之を見るに、日本人の體質は大に社會の發達に適することは古來我邦人が勤勉努力して夙に高等なる社會に進みしことは隠れなき事實にして、特に維新開國以來僅かに三十餘年間に於て他の文明國人が數百年の經歷を以て漸く建設したる開化に進みしことは世界に其例なく、之れが爲め曾て人口の減少せざりしのみならず、益増殖せるが如き、我日本人が發達に適する體質にあらざれば豈に斯の如くなるを得んや。又我邦人の稟性に於ても社會結合力に富めるを見る、元と社會は協力的のものなれば其の成立上協力に要する感情を要するのみならず、協力の利益を認むる明なかるべからず、抑協力には能く命

令に服従せざれば行はれざるものなれば、服従的稟性と命令者を信用する感情とは特に必用なり、社會成立の當初にありては有力者を以て無上の權力を有する者なりとの信仰なかるべからず、人民に此信仰あるときは其命令は永く實踐して社會は愈鞏固なるを得べし、我國家成立の當初より敢て愉ることなく愈鞏固なりしものは全く此要素の存せしによる、我國の當初は祭政一致にして社會の創立者たる諸神は降臨の天神なり而して其子孫は即ち天孫なり、天孫常に天神を奉戴して下民に臨まるとを以て下民の天孫を尊戴すること亦甚だ厚し、故に其命令は一に出で能く之に服従せり、斯る感情を有せしを以て我社會は團結益堅固なりき。

血統と社會

血統の關係は亦社會發達に必要なものなり、血統同じきときは社會の結合力を増加するものなり、即ち互に血族の好みあるのみならず、性質も亦同じく艱難相救ひ、同情相憐むの念特に深し、是を以て社會の分裂を防ぎ、益、進歩するものなり、我邦結合の古より鞏固なるものは、國民の血統皆同一種なりしが爲めなり、元來我國の人は皆天神の子孫にして、其性質習慣同じく相互に助成するの情も亦甚だ強かりき、彼の梟帥、土蜘蛛等の如き異種の民族は已に誅鋤せられたれば、國民は概ね同一種族なりと謂ふも可なるべし、斯の如く親族系統の制は即ち我國家の堅固なる所以なり。

種族

四大種族

國家團結の強弱は人種の異同、其一原因たることは前述の如し、我帝國の人種は大概ね同一の血統に出で、日本國民なる觀念に於ては固より毫も差違あるを認めず、然れども太初に遡りて其人種果して如何なりしや、又其本原の如何に就ては區々の説あり、今最も信憑すべき説に據れば、我日本人は大凡四大種族より成る、第一は本邦に於て最も多數にして最も有力なる純粹の大和種族なり、第二は曾て西南各地に住せし八十梟帥、即ち熊襲種族なり、第三は東北地方に住せしあいぬ種、及土蜘蛛と稱せし穴居種族なり、第四は臺灣の支那種、及臺灣蕃種是なり。

長各種族の消

以上諸種の中、大和種族は最も優等にして其發達するに従ひ、熊襲、あいの種及土蜘蛛等の諸蠻族を征服し、遂に國土の全部に繁殖したり、其後諸外國民の歸化したる彼の蕃別と稱する民種も少からざりし、此蕃種は多くは畿内、山陽、山陰、南海等に配置せられたり、此等の種族は遂に代々の威徳の下に服し、日本國民なる一團に凝化せられ、忠君愛國の至情に至りては曾て相譲らざるに至れり。

大和種族は國初我邦の西南部より漸く國の中央部に蔓延し、他の種族を戡定して遂に日本帝國を建設したる最も有力なる種族にして、或は蒙古種に屬すと云ひ、或は西伯利種に屬すとの説あり、斯く異説あるは一種特別の本體と地位とを有し、他の人種と同階圓中に置く能はざるものあるに

從來多くの學者は蒙古種に屬すと云ひ、近頃は西伯利種に屬すと云ふに傾きあり

熊襲種族

よらずんばあらず、泰西學者日本人種を叙して曰く、『肌膚は黄色より褐色に近く、身長は高からずと雖も、骨格頗る平均を得、顔面は稍平扁にして頭髮漆黒なり、眼斜に釣りて鼻高からず、容貌溫和なれども頗る威風ありと』然り我國民は氣質に於て優り身長に於て劣れり、日本成年男子の平均身長は五尺三寸にして體量は十三貫五百目を平均とす。

熊襲種族此種族は元と南洋諸島より移住したる馬來種にはあらざるかとの説あり、然れば今の臺灣生蕃と同圓内にあるべし、此種は黄色よりも寧ろ褐色にして、大和種族に比すれば鬚髯多く頗る勇猛なり、我國初に當りては諸の八十梟帥と稱して國の建設に甚だしき妨害をなし、代々の天皇親征の擧あるに至れり、然れども此種は早く皇威の下に服

し、後世大和種と混合して今は其差別なきに至る、熊襲の屯集せし地は重に九州西南部にして肥後南部より日、薩隅の北部は其巢窟にして肥後の球磨熊郡及大隅の嘯唳襲郡は其領分せし遺蹟なりと云ふ。

あいぬ種族

「あいぬ種族」此種は今の北海道士人にして、蓋し日本島の先住種族なり、古昔は日本の東半部に繁殖したりしが、今は北海道の一隅に其餘命を繋ぐに過ぎざるに至れり、此種は鬚髯々として深く、甚だ之を愛惜す、女子も唇邊に黥して髯に凝するの風あり、頭髮も後部は剃り上ぐれども其他は延びるに任せ蓬々として被髪せり、顔面は蒼色を帯び體格は頗る肥滿偉大にして、額高く眼窠深く鼻尖れり、「あいぬ種」は元と何邊より來住せしや、詳ならざれども、西伯利邊より樺

太を経て北海道地方より進入したるものなること殆ど疑なきが如し、此種在昔は國中に跳梁跋扈して帝國の建設を妨げしこと熊襲の比に非ず、然るに大和種の發達するに従ひ驅逐せられ人口も亦非常に減少して今は其總數僅に壹萬五千に過ぎざるに至れり、

穴居種族

太古東北地方に穴居せし土蜘蛛と稱せる種族は、今の「あいぬ種」と同族なりと云ふ者あり、或は土蜘蛛は朝鮮人種又は之に近親の人種にして、彼等の専ら居住せしと云ふ關東各地には朝鮮語より出でし地名ありて、「あいぬ」人の外、朝鮮人ありしこと疑ひなく、且つ「あいぬ語」に「ユロポングル」即ち「穴居者」と云ふ名詞あるは、「あいぬ」人の外穴居種ありしことを證すべしと云へり。

臺灣種族

支那種

熟蕃、生蕃

帝國々運の振興して版圖の擴張するに隨ひ臺灣人も亦我臣民となるに至れり、臺灣の住民は支那種蕃種の別あり、支那種は支那より移住したる人民にして、其風俗習慣等は殆ど現今の支那人と異なることなく、其住所は重もに西半部の平地なり。蕃種は馬來群島より漂流移住せしものにして、又熟蕃、生蕃の別あり、熟蕃は平地と山麓との間に支那種と雜居し、其習慣風俗は頗る支那種に類すれども、生蕃に至りては全く一種の性情と風俗とを存する野蠻人にして、東部山地に住み其蕃社壹百餘ありて互に争鬪し、首狩をなすものあり、阿眉蕃、木瓜蕃、太老閣蕃、知本蕃の如きは其重もなる蕃社なり。

次に帝國に現住する各種族の數を統計すれば左の如し。

- (一) 大和種 (雜種を混す) 約四千三百萬人
- (二) 琉球人 約四十萬人
- (三) あいぬ人 約一萬五千人
- (四) 臺灣人 約二百七十萬人
- (五) 臺灣蕃種 約十三萬人 (熟蕃四萬七千、生蕃八萬二千)
- (六) 居留外國人 約一萬二千人

族制

天孫

本邦の種族は國初より其制ありし、則ち種族の尊長は之を天孫と稱し奉り、天孫宗家の長を天日嗣と稱し奉れり。次に天神、地祇の稱あり、天神地祇は天孫支流の祖神より出たる祖種にして、後之を臣連と稱し、大化改新の後は之を真人、朝

皇別 神別 蕃別

皇族

臣に區別したり、嗟哉、天皇弘仁年間萬多親王、姓氏錄を著して日本種族を三種に區別せり、(一)皇別、(二)神別、(三)蕃別とし、尙此外に未定の雜種もありし、(一)皇別とは天孫にして皇族を稱することなり、總して皇別、三百三十三氏(錄姓氏)ありし、(二)神別は天孫支流より出でたる者にして、是を天神の血統とし、四百四氏ありし、(三)蕃別とは専ら外國より歸化せし人民の子孫にして、三百二十八氏ありて、賤業を營む最下の民種と定められたり、

其後種族の稱も種々に變遷せしが、近古に及びては親王家、公家、武家、町人、百姓、穢多等の區別ありしも、維新の後は之を皇族、華族、士族、平民の四階級と定められたり、皇族は天皇の御血統にして、天皇の御監督に屬し、尊嚴にして犯すべから

華族

士族

平民

ざる皇室是なり、華族は從來の公家及諸侯と稱し、諸國の領主たりし大名なり、又、維新後、國家に功勞ある廉を以て、特に新に華族に列せられたる輩もあり、多くは其格に應じて、公侯、伯、子、男の五等に分ち、爵を授けられたり、華族は政治上幾分の特權を有せり、今、舊新華族を合すれば、約七百家、其人口四千五百人あり、士族は武士と稱したる輩にして、封建時代、徳川幕府及諸侯の家臣にして、録を食み、俸を受けたる輩なり、其數約四十四萬家、其人口二百十萬あり、此族は政治上別に特權を有せず、又、社交上、特待を受くる權なし、と雖、國家主動の力は常に多くは此輩に存し、從來國家に偉勳を奏したる者、少なからず、近くは維新の大業の如き、武士の力によりて成就したるもの多し、平民は從來の町人、百姓と稱したる

もの及其他の種族にして、國民中其數最も多く約八百〇四萬家其人口四千百十一萬あり、此種族は從來政治上には寸毫の參與權を有せざのみならず、種族中に於ても頗る冷遇せられたり、維新後は參政權を與へられ其他の權に於ても士族と毫も差別あることなし、特に立憲政體の下にありて財産は幾分か政治上及社交上の特權ををなすに至りしを以て、國民の多數を占むる此輩は將來益發達すべし。

人口

人民

國民は國家活動の基礎

抑、人民は國家活動の基本にして、各個人相綜合すれば一個の協同團體となり、世界の生活に欠ぐべからざる物體を組織するものなり、故に國家の生活運動の起源基礎は常に一

個人身軀上の生活より始まらざるものなく、國家の進歩退却も又一個人の情況如何に伴ふものなり、而して人口とは協同體生活の諸要素に對し、國家の實力を顯はす員數なれば、人口の消長は直に國力の盛衰に關する一大原因となる、されば重なる國々に於ては人口は頗る精密に之を調査するなり。

人口の諸方面に於ける状態

人口は其觀察により種々の状態となりて國家を組織するものなり、即ち人民が自國に關し及外國との關係を現はすときは之を國民と稱し、其兵制に關するときは兵役義務を負ふ人となり、國家經濟に關するときは納稅義務を有する人となり、司法事務に關するときは裁判所管轄の人となるなり、夫れ斯の如く政法上各部の起源は必ず政法上の人に

もの及其他の種族にして、國民中其數最も多く約八百〇四萬家、其人口四千百十一萬あり、此種族は從來政治上には寸毫の參與權を有せざるのみならず、種族中に於ても頗る冷遇せられたり、維新後は參政權を與へられ、其他の權に於ても士族と毫も差別あることなし、特に立憲政體の下にありて財産は幾分か政治上及社交上の特權ををなすに至りしを以て、國民の多數を占むる此輩は將來益發達すべし。

人口

國民は國家活動の基礎

抑、人民は國家活動の基本にして、各個人相綜合すれば一個の協同團體となり、世界の生活に欠ぐべからざる物體を組織するものなり、故に國家の生活運動の起源基礎は常に一

人口の諸方面に於ける状態

個人身軀上の生活より始まらざるものなく、國家の進歩退却も又一個人の情況如何に伴ふものなり、而して人口とは協同體生活の諸要素に對し、國家の實力を顯はす員數なれば、人口の消長は直に國力の盛衰に關する一大原因となる、されば重なる國々に於ては人口は頗る精密に之を調査するなり。

人口は其觀察により種々の状態となりて國家を組織するものなり、即ち人民が自國に關し及外國との關係を現はすときは之を國民と稱し、其兵制に關するときは兵役義務を負ふ人となり、國家經濟に關するときは納稅義務を有する人となり、司法事務に關するときは裁判所管轄の人となり、なり、夫れ斯の如く政法上各部の起源は必ず政法上の人に

あるを以て内政は總て人口を以て基本とし、之に由りて事を始め、又之に由りて事を終らざるべからず、實に内政の意思及行爲は人口を俟て始めて知るを得べきものなり。

人口は斯の如く爲政の基本となるを以て、人口の如何は必ず之を明悉せざるべからず、而して人口の状態如何を考究せんには事實によりて知らざるべからず、其事實を表明するものは人口統計是なり、人口統計は國家生活の實況を觀察し、而して其觀察の平均を採り、以て事實を確定し、且つ其生活に關係ある原因及結果を探究して、其國の生活には如何なる法則あるやを發見すべき必要のものなり。

人口沿革 人口は各國共に沿革を有す、而して其沿革を觀察するときは、國々に於ける特有の性質を究むるに於て、或

人口統計

人口沿革

人口統計の進歩

は原因となり、或は結果となるの理を明にすることを得べし。我邦現今の人口を記述するに先だち古來本邦人口の景況を畧述すべし、然れども前に述ぶるが如く上古人口の状態は固より之を知るに由なく、又國家の秩序稍々整頓したる時にありても、人口の統計は只兵事若くは財務に關する目的を以て調査したるに過ぎざりしを以て、正確を證し難し、但し何國を問はず、人口統計の沿革たるや、最初は人口を概算するに起り、次に人別調査となり、漸く進んで人の關係、即ち年齢男女の別、家族の關係、宗族等を示し、尙進んで社會の關係、即ち身分、職業、教育、經濟等を示し、遂に方今は人民生活の状態を網羅せんとするの勢に至れり。

蓋し我邦に於て人口調査の最も古きものは推古天皇十八

古昔の日本人口

年即ち西暦六百十年(610)以下日本曆の下に數字)の調査なるべし。當時に於ける我邦の人口は四百九十八萬八千八百四十二人(太子)と稱す。其數は大畧今の和蘭、葡萄牙等の人口と同じく今の九州の人口にも及ばざりし。又其一方里内に對する住民は漸く二百人餘に過ぎずして、人煙の稀疎なること今の北海道を除く外之に比すべき地なし、而して其配布の狀は多くは畿甸以西の地に住せり。

奈良朝時代の人口

其後聖武天皇の天平八年(736)には殆ど八百萬人(十玄)に及びたりと稱すれば、平均一年に三千二百人増加したるが如し。其後延享元年(1784)には既に二千五百六十八萬人(秘策)に達したれば、此千八年間の増加は正に三倍にして平均一年に一萬七千五百四十人の増加なり。此時に及びては一方里

徳川時代の人口

内既に千〇三十五人を容るゝの稠密となり、殆ど今の佛蘭西に比すべき密度なりとす。其後寶曆六年(1756)に及びては二千六百六萬に及び、殆ど今の南亞米利加洲の總人員に比すべき數に上り、其間は平均一年に凡三萬人の増加なり。文政十一年(1828)には二千七百二十萬人(諸國人)に及びたれば、一年一萬六千人の増加なり。降りて明治五年(1872)には三千三百一十萬となり、一方里内の人口は一千三百三十四人に及びたり。即ち此間の増加は四十四年間に五百九十一萬人を増加し、平均一年に拾三萬四千三百人の率を以て増加したり。

明治時代の人口

然るに明治三十二年(1899)には既に四千六百四十四萬人に及びたり。即ち一方里に對し、平均一千七百二十人に當る之

近今の人口

明治時代人口の増加

を一方哩とすれば二百九十人に當り、一方軒とすれば百六十人に當る。故に人口の稠密なること世界中第四位に在り、又四千六百四十四萬人を全國の現在戸數九百十六萬戸に配當すれば、一戸平均五人〇六の家族となる。

現今の人口四千六百餘萬なる數は英國の人口より多きと約八百萬にして、濠洲の總人口數の二十倍なり、之を明治五年に比すれば二十六年間に約一千四百萬人の増殖にして、平均一年五十四萬人を増加せり、此の五十四萬なる増加率は、現今日本版圖の面積と人口との割合より云へば、年々三百方里の版圖、即ち山梨縣程の土地を新に増加するにあらざれば、今の密度の割合を保つこと能はずして、年々土地の狹隘を訴ふるに至り人口に對しては三百方里の土地を失

新販國の人口

ふに等し、且つ人口増殖の比例は遞加せざるを得ず、假令今日の比例數を以て増加するとするも、百年の末には、我邦の人口は正しく今の二倍、即ち約壹億となるべし。

明治二十七八年戰勝の結果によれる新販國の幅員は、二千二百六十八方里にして、人口未だ二百七十萬に過ぎざれば、若し本州の如き密度に至らしめば、尙五百餘萬人、即ち十年間の増殖人口を容るゝに足るべし。

増殖の状況

増殖率の小さな地方

本邦の人口は以上の如く盛なる勢を以て全般に繁殖しつゝあれども、各地に於ける増殖の比例は自ら異にして、稠密の部より自然に稀疎の部に轉流するの傾きあり、即ち明治二十五年より同三十年に至る五年間、各地に於ける人口千人に對する増加を示せば、日本全國の平均増殖は一千人に

増殖率の大なる地方

付五十二人なり、而して其平均以下にある各地は北陸、南海、山陽、山陰諸道の如き舊地にして、山陰道は二十人、南海道は三十人、山陽道は三十八人にして、最も少きは北陸道にして、即ち十七人の割合なり。

更に増殖の平均以上にある處を舉ぐれば、近畿以東の各地にして、即ち畿内は一千人に付六十人、東海道は五十六人等にして、此等は素より人口稠密なれども、商賣の中央場を占め、百貨輻湊し、交通從て頻繁なれば、生計を得るの途も、他に比すれば亦頗る容易なるを以て、人口は尙群集するの傾あり、次に東山道及舊奥羽の如きは本州に於ては人口最も疎なる處にして、中仙道及奥羽の中央部等には未だに人跡稀なる空地を存す、故に人口も亦之に向て移るの傾きあり、即

北海道の人口増加

ち東山道は五十五人の増加にして、奥羽の如きは殆ど六十人。人の増加なり、最後に北海道は人煙最も稀なる處にして、近來は漸く此地に向て生活を求むるの趣ありて、六百四十五人なる夥しき増率を以て轉流せり、即ち毎年殆ど其人口の過半を増加する割なり、加ふるに北海道の増殖の比は一年に驚くべき増率となり、明治十五年より同二十年に至る五年間には千人に對する三百四十五人の増加なりしが、同廿五年より三十年に至る五年間には即ち六百四十五人の増率を見るに至れり。

男女の比較 人口統計上、男女數の不平均は不幸の基にして、甚だしき過不及なき程幸福なる國民とす、歐洲諸國にては女子の數常に男子の數に超過し、英國の如きは女子の男

歐洲は女子多く、日本は男子多し

日本の男性
超過

子に對する超過數は八十九萬人にして、獨逸の如きは一百萬人なり、男女の數最も相近きを以て誇る佛國も尙女子の數多きこと二十七萬人なり、日本は之に反して常に男子の女子に超過するを通例とす、此原因に就ては種々の説あれども男子の女子に超過するは統計上争ふべからざる事實にして、明治卅二年に於ては左の如き結果を見る。

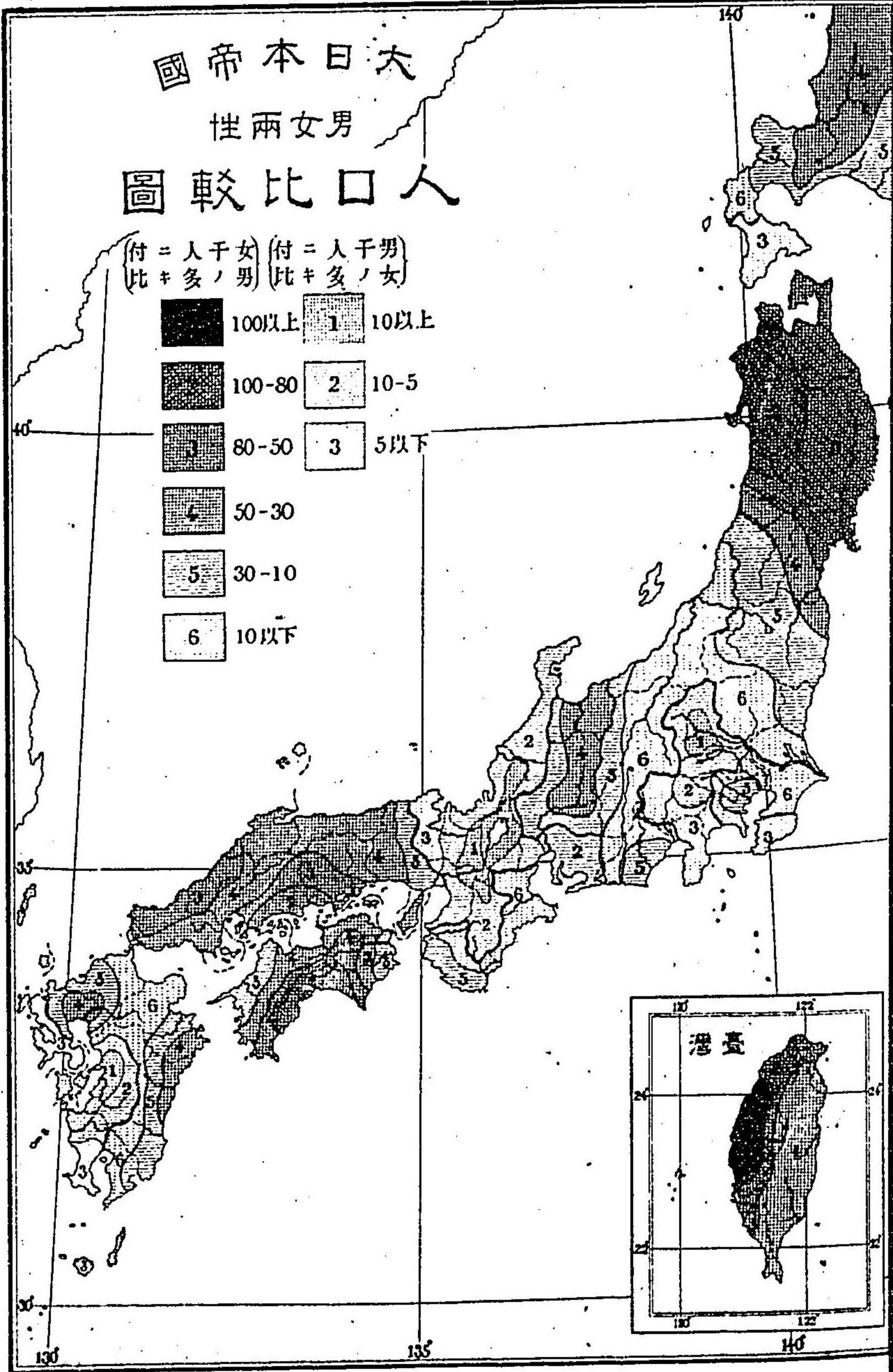
日本人口 四六、四四四、五二四

男 一三、五〇〇、六四三

差 五五六、七六一

女 一三、九四三、八八一

即ち男子の女子に對する超過は五十五萬人に及べり、即ち男百人に對し女九十七人の割合なり、而して男女兩性の比例は地方によりて異なり、例へば男性の女性に超過する一方には、女性の却て男性よりも多き地方あり、而かも其配布



日本の男性
超過

子に對する超過數は八十九萬人にして、獨逸の如きは一百萬人なり、男女の數最も相近きを以て誇る佛國も尙女子の數多きこと二十七萬人なり、日本は之に反して常に男子の女子に超過するを通例とす、此原因に就ては種々の説あれども男子の女子に超過するは統計上争ふべからざる事實にして、明治卅二年に於ては左の如き結果を見る。

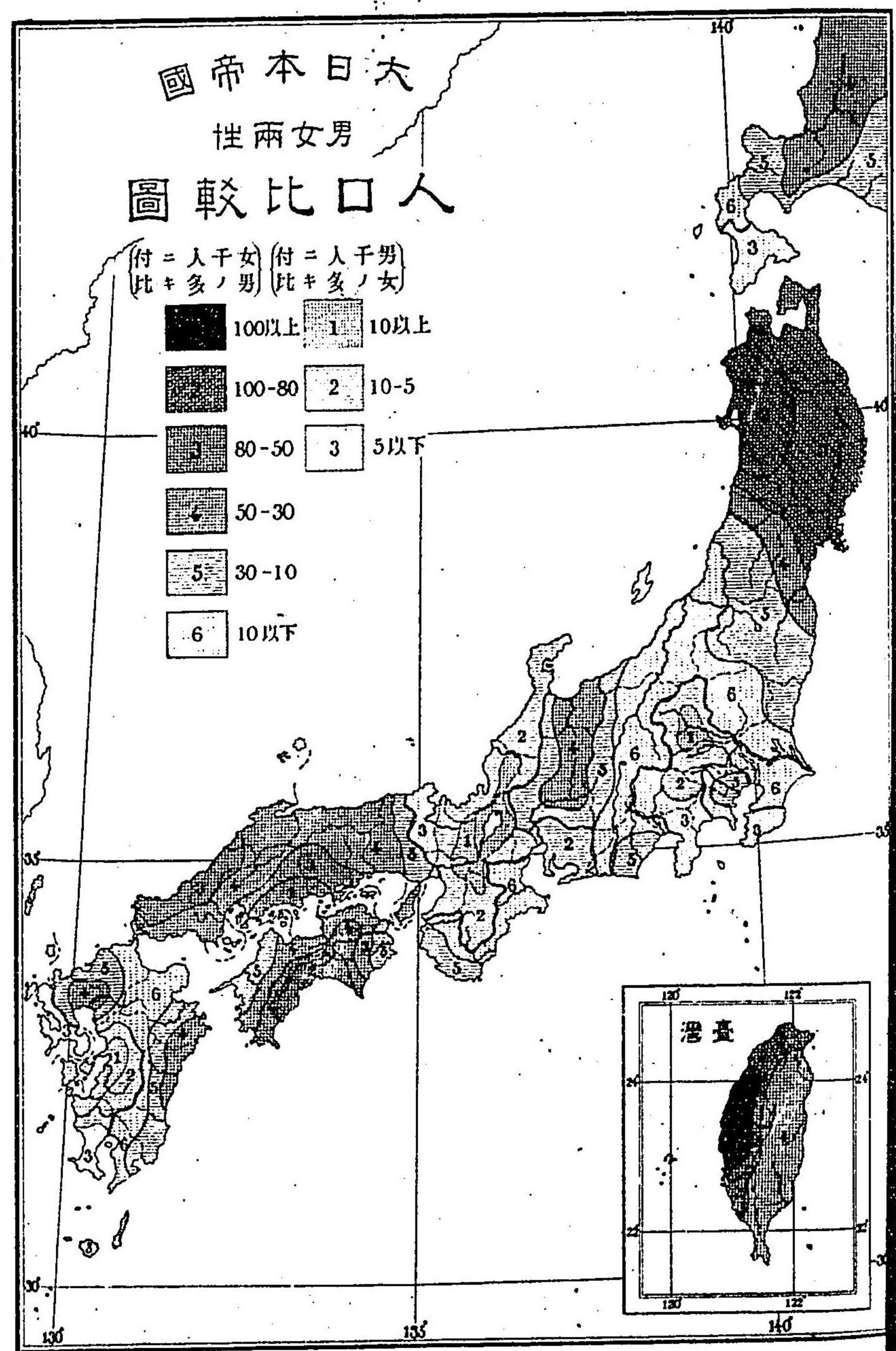
日本人口 四六、四四四、五一四

男一三、五〇〇、六四三

女一三、九四三、八八一

差五五六、七六二

即ち男子の女子に對する超過は五十五萬人に及べり、即ち男百人に對し女九十七人の割合なり、而して男女兩性の比例は地方によりて異なり、例へば男性の女性に超過する一方には、女性の却て男性よりも多き地方あり、而かも其配布



女性超過地

は自から一の系統を存するが如し、先づ男性の女性に超過する地方を擧げんに、舊奥羽は最も男性の多き地方にして、仙臺以北の地は特に著しく男性を多しとす、即ち三百七十萬の人口に對する男性の超過は約十萬にして、男百人に對し女九十六人なり、羽後地方は最も不平均の地にして、男百人に對し女九十二人とす、次に中國地方一帯も亦概して男性の女性よりも多き處にして、兵庫以西の地、南は山陽、北は山陰諸國に聯絡し、皆著しく男子を多しとす、殊に三備地方は男百人に對する女は九十二人に過ぎず、又對岸の伊豫土佐も同じく男子を多しとす、瀬戸内海を圍む地は總て男子の數多し。

女性^〇の^〇男性^〇に^〇超過^〇する^〇所^〇も^〇自^〇から^〇地方^〇を^〇畫^〇り^〇存^〇する^〇もの

の如し、即ち北陸道諸國より京阪地方及東海道處々の如き概ね一聯絡をなして女性の多き地あり、石川、福井の兩縣は皆女子多くして是より近江及大阪地方に及べり、特に近江の如きは千人に對する女性十五人の超過なり、東海道にては愛知、山梨、埼玉の諸縣及之に連なる群馬縣に至るまで、女子の多き所とす。

男女数の平均せる地方

臺灣は最も不均

次に男女の數最も平均を得たるは九州地方にして特に南方に至るに従ひ益々平衡を得るに至るの傾向あり、今其各地の百人に付男子の超過を示せば福岡、佐賀は各二人にして大分、鹿兒島地方は僅に一人、長崎は五人なり、而して熊本は女子の超過千人に付十人、沖繩に至りては二十人の多きに至る。臺灣は元と移住地なれば男性の數著しく多く中にも

臺中地方の如きは百人に付き男性の多きこと十人乃至二十人の多きに至る然れども澎湖島は移住民寡きを以て百人に付僅に三人の男性超過のみ。

の配偶

家族及小兒

以上の如く本邦は男女の數、他の諸國に於けるが如く不均ならずして、獨逸の人口は五千二百萬にして一百万の差あり、英國は人口三千八百萬にして女性の多きこと九十萬人なり、然るに日本は四千六百萬に對し男性の多きこと五十五萬なり、故に日本は結婚の數從て他の諸國より多く配偶の數は七百八十九萬あり、即ち二十三歳以上の男女にして殆ど配偶者二に對する無配偶者は一の割合なり、又家族の平均數は五人〇六にして歐洲各國の平均數は四人一七なり、家族中兒童の平均數は一人五に當り歐洲各國より

成年者

も小なり。
 又十五歳以上の人を成年とし乃至六十歳までは社會の事業に堪ゆる生産者として、歐洲中、佛國は此生産者の數他の諸國の上位を占めたりと云ふ、即ち人口一萬人に付五千四百人の生産者あり、次で和蘭は五千人、瑞典は五千人、英國は四千七百人なり、又北米合衆國は四千四百人なるに、我國は佛國よりも上位を占め、現に五千九百七十五人の多數を占めたり、斯く生産者多きは人口統計上、國の幸福なりとす。
 人口の配布 現今(三十一)日本全國各部に於ける人口の密度は左の如し。

分界	面積	人口	一方里人口
畿内	四四六 ^{方里}	二、一五、八七〇	六、〇九五

東海道	二、六五九	一〇、〇六六、〇四七	三、七八六
東山道	二、六〇三	四、五〇八、六四一	一、七三二
舊奥羽	四、二四七	四、八三〇、六四五	一、一三七
北陸道	一、五七八	三、八九八、六九四	二、四七一
山陰道	一、〇八八	一、八六〇、三一〇	一、七一〇
山陽道	一、五七〇	四、三三七、五二六	二、七六二
南海道	一、五六二	三、七七六、三〇〇	二、四一八
西海道	二、六一八	六、一八四、四三九	二、四〇一
北海道	六、〇九五	六、一〇、一五五	一、〇〇〇
臺灣	二、二六八	二、六六〇、一二一	一、一七四
琉球	一、五七	四五三、五五〇	二、八九一
其他諸島	一、七三	四一四、九五八	二、三五二

人口の暫流

總計 二七〇五八、四六、四四四、五二四、一七二〇
 人類は總て生計餘裕の地を覓めて自ら轉流するの性を有す。彼の中央亞細亞及阿非利加内地の沙漠の間に漂泊する蠻民が常に水草を逐ふて轉移するものは其救濟主なる駝の食用に供すべき綠草及飲料に供すべき泉水を得んが爲めなり、西班牙人が生計餘裕の地を求めんとして南米の新野に向ひしが如き、總て移住と云ひ、殖民と稱し、今も盛行はれつゝあるは人口轉流の現象に外ならず、斯の如くして世界の各地には漸く人類の散布するに至りしなり、されば生活の原料に乏しき所は千里人跡を絶つこと、彼の「サハラ」若くは蒙古地方の如き所あるに反し、若し生計を資すべき地の存するあれば、人の覓めて之に來集すること恰も蟻

35

30

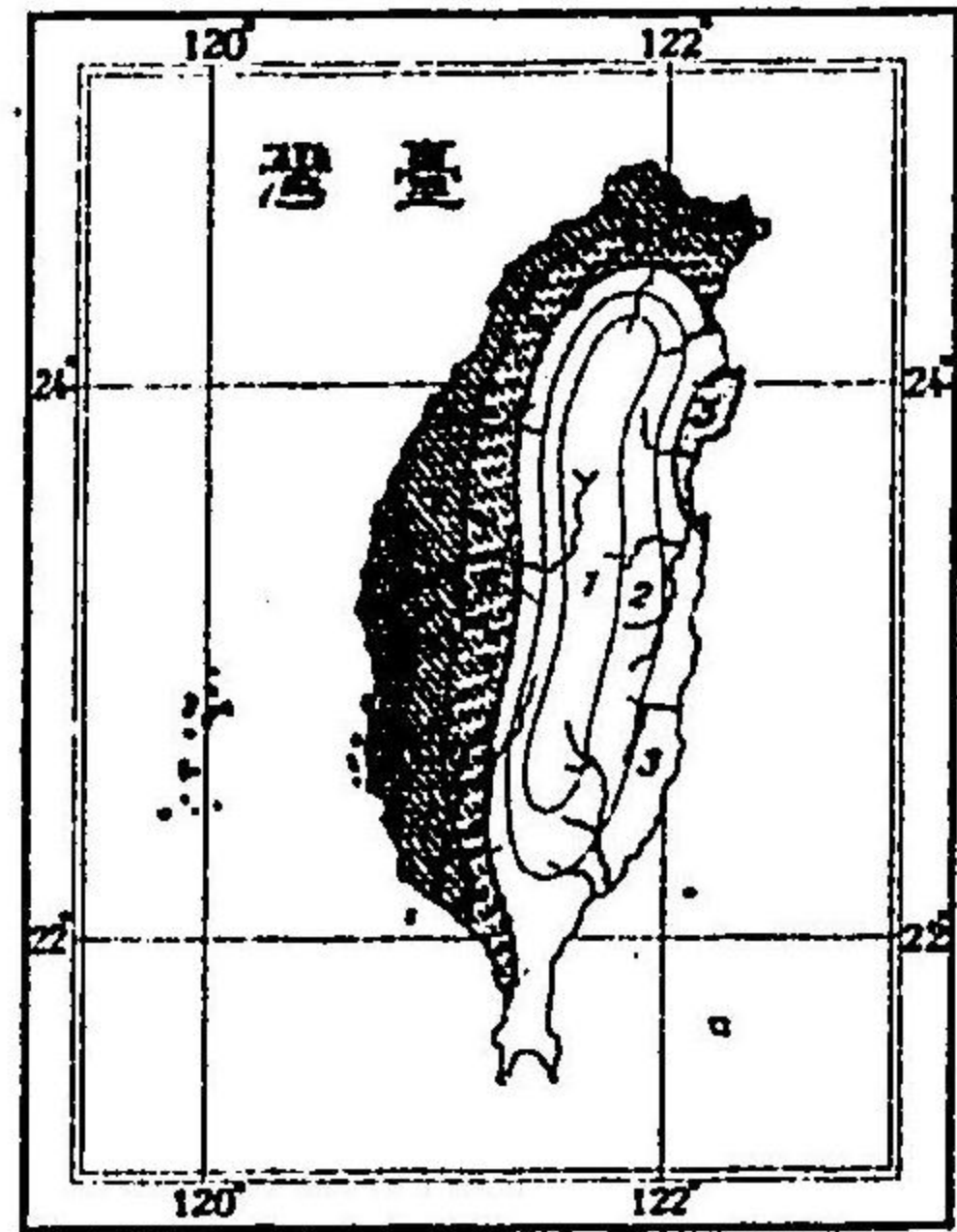
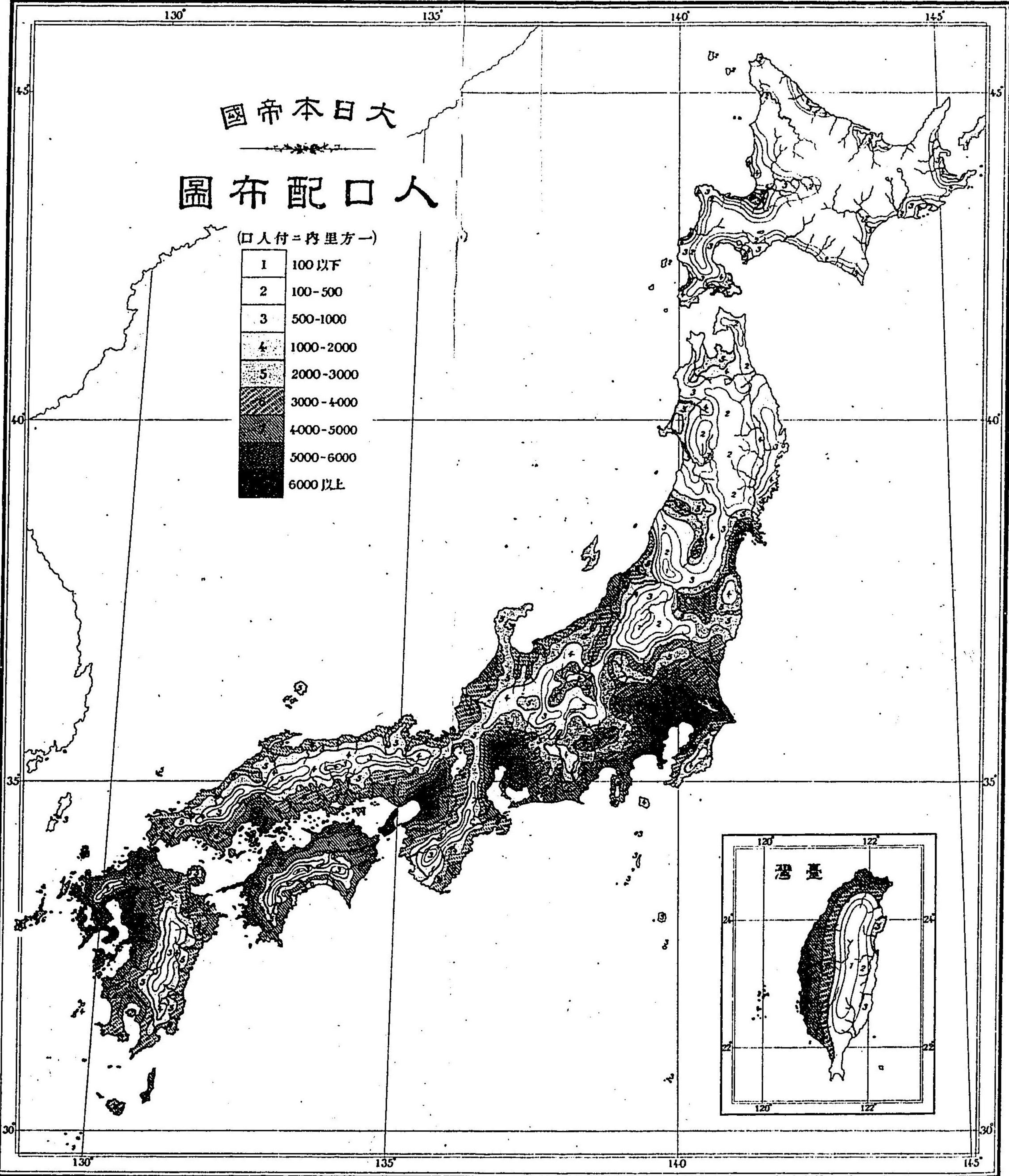
145

大日本帝國

人口配布圖

(一方向里內 = 付人口)

1	100以下
2	100-500
3	500-1000
4	1000-2000
5	2000-3000
6	3000-4000
7	4000-5000
8	5000-6000
9	6000以上



蠶の甘味に於けるが如く、拂へども直ちに集り、忽ち人口稠密に至ること、彼の支那平原の如き、印度沃地の如き、住民期せずして填充するに至るべし。

日本人口の
増流

我邦人口の配布を案ずるに又同じく以上の如き事由に支配せられたるを見る、抑有無相通ずるは人生の幸福を増進するの基にして、人類爰に集れば必ず此の方法なかるべからず、是れ通商貿易の基源にして、其の通商貿易を資くべき第一の便法は通路運輸の自在なるにあり、故に通路は成べく天然の障害を避け、天然の與ふる便路に就かざるべからず、即ち是より彼に通ずるに山岳を越へ、溪水を渉るの困難を避けて、河道の便に従ふが如き、又は貨物を運搬するに陸路の人力を費すこと多き困難に代ゆるに、海運の利に依る

人口と沖積層地

が如きは、大に便益を覺ゆべし、故に河道海濱の地は人類の生計に便なる一要素にして、人口は必ず先づ河道海濱の地に集り、後世繁華の街區となること蓋し自然の勢なり。爰に又人口の輻湊を促すべき一要素あり、沖積層の平原地是なり、總て人類の生活に要する食品は重に沖積層の地に生ずるものなり、本邦人の主として食料に供する米、又之に次ぐ麥及其他の穀類は、悉く沖積層の地に生ぜり、且つ沖積層の地たる水波の作用によりて靜に沈澱したる地層なるを以て平坦低遠にして天然の障害甚だ少なく交通最も便なる地なるが故に、人口の之に赴くこと夥しく、沖積層の地は常に人口稠密の部となれり。

人口の集合

以上の如く住民集居の原因は總て地形に關し、而して其地

關東平原の集合

形には下の三要素あり、(一)河道(二)海濱(三)沖積層地是なり、故に若し此三要素を兼ねる地、即ち詳に云へば沖積層の平地にして、河流之を貫通し、加ふるに其地海に濱するが如き地ありとせば、人口の群集すること實に夥しく、其中央の要所は忽ち大都會の地に撰定せらるゝに至るべし、されば本邦にても東京、大阪、名古屋の如き大都會は皆此三要素を供へたる地なり。

關東平原 此平原は沖積層を以て成る日本第一の大平原なり、故に爰に集まる人口は實に驚くべき數にして、無慮五百八十萬の人民は此沖積層に集まれり、即ち僅に百三十方里の地に全國七分の一の人口を吸集せり、此地一方里内の住民は凡そ四萬四千六百人の平均を以て群集するに至れ

東京の密集

り、特に平野の南端は囊口を約するが如き内海に濱し、荒川多摩川の水路は之を貫通する最も好良の位置なり我首府たる東京の地即ち是なり、故に其人口は現に百四十五萬と聞へ、僅に一方里内に三十萬人を容るゝに當る、即ち空地庭園街路をも合算して三十坪に付一人の割なり、是に至りて人口の最も稠密なるものと云ふべく、土一坪に金一坪の謬あるも亦宜なり。

畿内平原の集合

畿内平地 此沖積層平野は關東平野に次ぐ平原なり、故に人口の群集も亦之に次ぐ、此平野に住する者總て二百二十萬人あり、平均一方里内に一萬五千人以上を容る、其茅渚海灣に臨み、淀川の便ある地に群集せる場所を大阪とす、此地は一方里内凡二十九萬人の割を以て住し、總て八十二萬人

大阪

筑紫平原

内海岸

仙臺平原

人口の集合と海岸線

の人口あり、濃尾の平原は伊勢海に濱する沖積層とす、此平原に集まる者總て二百三十萬、其名古屋は鳴海灣に據る輻湊地なり、其他人口稠密の地は皆此等の便あり、筑紫平原に於て人口の密なるは有明沖に濱する沖積層地にして、河道の便宜に據る處なり、中國南部の瀬戸内海に濱する沖積層の地及其對岸なる四國北岸の如き、皆人口稠密なりとす、東海道南岸は海岸線の出入多く海濱には新層を存するを以て人口茲に輻湊す、仙臺の沖積層平野には松島灣に臨める輻湊地あり、日本海岸の地も沖積層の平野には何れも人口の輻湊すること多きを見る。海岸線の延長と人口とは又親密の關係を有するものなり、即ち海岸の出入多き地は常に人口輻湊す、蓋し運輸交通は

船舶の便によること多きが故に其寄泊に便宜の地形あれば貨物旅客其便を利用して是より出入し貨物の陸揚げ船積み旅客の宿泊來往船員の需用等に供する目的を以て忽ち人口輻湊するに至る我邦古來人力を以て其門口を封鎖せしも遂に時運の變遷に迫られ一たび其封鎖を解くや恰も水の低きに就くが如く人口忽ち之に向へり横濱の一漁村より一躍して人口二十萬の繁榮市街となりしが如き神戸の一村落后り人口二十餘萬の埠頭となりしが如き其海岸線の灣入によりて斯く人口を吸集せり又古來封鎖の時代にありても尙海岸の灣入は既に人口を集めたり肥前乃母崎の灣入に長崎あり伊豆須崎の灣内には下田あり其他多度津函館尾の道の如き其一部に人口を集むるもの決し

人口と高臺

て偶然にあらざるなり。

人口の輻湊すべき原因に反し海岸の平地を離れて内地に入れば人口次第に減少し遂に古生岩の高臺及火山性の硬岩地に及べば殆ど住民の絶ゆるを見る蓋し斯の如き山地は農産少く食品缺乏して生計に困難を覺ゆると交通不便なるを以て人類の生存に適せざればなり東山道内地の火山脈地方の如き中國中央に亘る花崗質山地の如き或は四國の中央古生岩地方の如き九州中央の火山岩地方の如き皆人煙稀疎なるは此理に外ならず。

人口と特産物

又特種の特産は其地一部の繁榮を招くこと多し例へば石炭の産出の如き忽ち人口を吸集するの源となり九州地方にては高島の炭坑及三池の炭産によりて大牟田市街を建

人口の移動
長 國家の消

てしが如き、其他礦物の産出は地形の如何を問はず人口を
 吸集せり即ち佐渡の金、生野半田の銀、又足尾阿仁の銅
 鑛に於けるが如き、其他越後處々の石油に於けるが如き、皆
 一部に人口を吸集せり、又鑛泉の湧出によりて熱海、有馬道
 後に人口を集め或は函根の溪谷、鹽原の高地、草津、伊香保の
 山間さへも亦人口集合の地となるが如き是なり。

人口の消長は則ち國力の盛衰に關涉すること大にして其
 増減の結果は、古來人類歴史上に一大事蹟を留むること其
 例少からず、或地方は人口過殖の餘、生計漸く困難を訴へ、又
 或地方は人口寡少に失し、因て爰に人民の大移轉を招くが
 如き、歴史上の基礎となること多し、亞細亞及歐洲に行はれ
 たる大移轉の如き要するに人口増減の結果に外ならず、其

人口密集地
戰場

他支那中原の争亂は、人口過殖の原因よりして多數の人民
 が江河畔の豊富なる沃野を占領せんとするの競争にして、
 獨逸民族が東方より漸次に西方に遷るが如きも亦人口増
 殖の結果に歸すべし、古より我日本人民の漸次東方に轉遷
 する傾向あるも、人口増殖より出づる現象にして、日本の競
 争點(血戰場)は常に人口稠密の場所と一致するも亦其二證
 として見るを得べし。

人情

地形風土と
人情

國民の特質なるものは、其住地周圍の地理的即ち氣候風土
 等に依りて養成せらる、故に其住民の特性を知らんと欲せ
 ば必ず先づ周圍の地理的事情を察せざるべからず、我邦は

人質に對する日本の天

温帶中に位して暖流之を繞り氣候溫和にして山水亦頗る秀麗なり其人情習慣の優美にして美術を愛するも而かも勇敢の氣象を損せず思慮深くして學術を好み緻密にして技藝に巧みなるは固より其處なり泰西學者の日本人の性質を叙する言に曰く其性質は傲慢にして復讐の念淺からずと雖善良にして鋭敏なり而して能く業務を勉勵して俠氣あり又一般に禮義を重ずるの風ありと以て西人の日本人の性質を觀察せる一斑を知るに足らん。

島國氣風

日本人の氣質は上來の如くなるべしと雖島國人なるを以て又一種の特性あり凡て島國人の氣風は敵愾の氣熾にして愛國心深く一旦事あるに臨みては外に對して團結甚だ固し是れ全く四面環海なるを以て慨然身を以て郷土を衛

島國と愛國心

るの風あること恰も航海中其船を愛し同乗の人相親むに異ならず外評の所謂日本人の傲慢又英人の國自慢の諺あるが如き島國人は總て一轍にして我國人の有する和魂なる一種の氣魄は外人の所謂傲慢と評するものならん我國風の美亦實に愛に存せり想ふに我一小邦を以て古來支那の凌辱を免れ或は三韓を蹂躪し或は元寇に凱歌を擧げ若くは近今外征の諸役に忠勇義烈常に水火を踏んで厭はず大敵を見て懼れず而かも窮鳥は懷を開きて之を憐み秋毫も犯す所なきが如き皆國人が和魂なる敵愾の氣象を煥揮したるに外ならざるなり。

島國風の規模

然れども島國人として又一種の偏僻あるを免かれず何ぞや規模狭小にして雄遠壯大の氣に乏しきこと是なり島國

の山水は大陸の如く雄壯ならず是れ氣象も又自ら感化せらるゝ所ならん例へば内に些末の得失を争へども對外の方針を講ずるに迂なり寧ろ箱庭の泉石を愛すれども却て山高海濶の風致を賞するもの少なし只小刀細工の技術に巧みなれども省勞の大機關を製するに妙ならざるが如し其弊や徒らに彈丸黒子の郷土に戀々として遠征壯遊を好まず『地球隨所是我郷』と謂へるが如き壯圖の氣慨に乏しく遠征の客を襲ふものは先づ懷郷病なり故に島國は何れも人口稠密なるを常とす我邦人口の溢れん計りなるも其例證として見るべきなり且つ多年鎖國の餘弊として交際國の間に伍しては頗る輕侮を招く事あり例へば契約を實行する念に乏しきが如き又時間を忽にするか如き共同物を

島國と人口

鎖國の餘弊

重ぜざるが如き總て社會的公德に意を注ぐの厚からざるは頗る省みるべき點なり。

人情の變遷

我邦の如き古國にありては世の盛衰變遷に伴ひ人情の如きも亦其時代によりて同じきこと能はざれば歴史上に於ける人情の變遷をも觀察せざるべからず然れども是れ歴史に譲り爰には直に種々の地理に圍繞せらるゝ現今の人情に就て述べんとす。

都會氣風及其特點

都會の人情 繁盛なる都會に住する人民の性質は機慧敏捷なれども而かも概ね輕佻浮薄に流れ易く金錢崇拜の傾きあるを免れず是れ田舎と其趣を異にする所なり都會の住民たる元と地方より來りて集居するものなれば假令軒を駢へ屋を對すと雖各其郷土を異にする烏合の住民にし

て其性質習俗相異なるのみならず、其何地の産にして如何なる素性なるやも知らざるを以て自ら疎遠にして厚諒を缺き輕薄なるべきは免かれざる趨勢なり、特に都會は世務多端、人衆繁雜なる等は導きて澆薄の風に陥らしむるものなり、又金錢を投ずれば何物も立ち所に便じ金錢萬能の有様なれば自ら拜金崇に傾くは都會の通じて免れ難き弊風なりとす、然れども各所に於て自ら特質なき能はず今之を例擧すべし。

東京氣質

東京は所謂武藏野にして地は沮洳卑濕、境は四顧寂寥の平原なりしかば置都以前の原住民は、其性淳朴、厚直なりしに相違なきは、今尙東京近傍の村落に住める人の朴實なるに徴して知るべし、然れども其一旦都人士となるに及んでは、

京都氣質

輕佻となり、浮薄となり、又峻嶮となるを免れず、而して舊幕時代に養成されし江戸子氣象は今尙存して豪俠氣を使ふの風あり○京都人に至りては全く東京人と其揆を異にせり、京都の地たる三面山岳を以て圍まれ、内に嵐山、鴨水の風光あり、名祀、巨刹亦多く、古來奠鼎の地なりしを以て、都人は自ら閑雅、溫籍、容貌も亦優柔なり、然れども舊都の殘夢に耽り、自負高慢にして移り難きの風あり、又儉素にして作業を勤め市中扉を閉ぢて内作するもの少なからず、婦人の如きは用を節して一向服裝に費やすを喜ぶ、凡て粗雜暴露を卑むの風あり、故に民情寧ろ沈綿に失するも輕佻の風なきなり○大阪に至りては地既に東西の咽喉を占め運輸至便港灣の繁盛なる居然一商地なれば、人情慧敏にして財利の風

大阪氣質

を免れず、而して西京に比すれば頗る華奢に流れ性質柔喩なりと云ふ、人國記に攝津は渡世利倍の風強く總て柔弱虚誇なり是れ古來入津集會の地なりしによる云々とあり、人國記は北條時頼微服して四方に遊び遍ねく全國の人情習俗を探り記述する所と云ふ是れ信し難き説なれども其記する所頗る適功、昔日各地の人情を察するに足るものあるを以て往々摘録す。

開港場氣質

前、三大市の外神戸の如き横濱の如き人民輻湊し繁華なる地は到底華侈と輕薄の二弊は免るゝこと能はざるなり、又長崎の如き四圍の淳朴なるに拘らず古來好埠頭の地にして旅客の來往頻繁なるを以て輕佻褻俗の評あり、特に近年外交の盛なるに従ひ彼の醜業婦女は多く、此港門より出て

平原氣質

たりと云ふ、四日市、新潟、馬關の諸港も人質便巧に馳せ伶俐に趨る等免れ難き勢なり。
平原地の人情 四望開達の平原地に住する人民の心情は念頭亦自ら雄偉廣大なる想像を描き來り概して壯圖の情に富み小毫に齷齪たる者稀なるが如し、之を世界平原國の民情に徴せば甚だ明なり、我邦は元來山國にして平原の地に乏し、然れども強て之を覓めば亦小平原なきにあらず、此等の住民に於ても山間の住民とは其性の相異なる處あるを見れば、自然形勢の人の心情に關することの大なるを知るべし、我邦平原地の住民も概して云へば素通豁達にして進取の氣象乏しからず、左に各平地に就て之を述ぶべし。
畿内平地の住民は快豁なれども優柔を免れず、在昔日本の

日本の平原氣質

近江 文華を進めたる偉人は多く此平原より出てたり近江の人は伶俐最も商賈に長し全国各地を行商して到らざる處なく『近江商人』の名世に高し濃尾平原の住民は溫和なれども元龜天正の昔は猛將勇卒多く此平原より身を起して日本全國を蹂躪したり人國記に尾張は進走の氣強く善惡共に其方に移り易く從て退くことも早し且つ勇氣ありてきび敷處もあり故に昔より秀者を出せり又謀反一揆を起せし事も古來少なからずとあり四國の内海岸平地に住む人は氣質稍溫柔なり○奥州平原は人口密ならず未だ朴直驍勇の風を失はず關東平野の住民は古の所謂關東武者にして頗る勇敢驍果の風ありて任俠を貴び壯圖に富めり然れども其弊や慄悍粗豪に陥るものなきにあらず古より伊豫

四國 奥州 關東

石狩平地 の海賊關東の強賊の諺あり人國記に武藏は活達にして氣廣し是れ東に江海を受け廣大の地あり古は武藏野とて曠野相續き自ら人の心も活氣あり總の國は勇氣關東第二に下らず常陸は少しく暴戾なりと云へり。石狩川沿水平野は新開の地にして皆内地各所の移住民より成れば未だ特種の氣風を養成するに至らざれども新開地の常として人情敏達して活氣を帶ぶ他日北海道の新氣質を陶成するは此平野にあらん筑紫平原の住民は九州中比較的に伶俐豁達なり人國記に筑前は九州中の華奢國にして酒色を好む人多し是れ古より太宰府とて九州領國の府ありし地なるによるならんと云へり近來は又産炭の爲め富多く益奢侈の風を助長するの傾向あり筑後は實義あ

筑紫 筑前 筑後

肥前

肥後

賀越

北越

山地氣風

りて虚飾少く、肥前は勇爲にして溫和を缺くとは人國記に記する所なり、是れ地形の三面海中に突出して直に朝鮮に接し古より外寇の衝に當りしによるべし、肥後は勇敢なれども智あるを以て分別多く思ひ思ひなる故一和せず上下共に才ある國にして人々不義を惡むの風ありと人國記は云へり、賀越海岸の平地は總て智慮多く辯口巧みなり、人國記に「越前の如きは日本無雙の智惠國なり」と云へり、是れ畿甸に近く古より交通開けたるによるべし、越後は勝事を好む氣象多く幼少より強を以て勵ます(人國記)以上は總て平原地住民の氣質一斑なり。

山地の人情 山地の人情は平地の潤達なる氣質に代へ偏固なるを免れず、山地は交通不便にして輕佻の風吹き到る

芳野

濃飛高原

信野

こと稀にして眞摯朴實等の義風尙存せり、加るに山高く谿深く鳥獸を爰に逐ふ等は頗る勇敢の性を養べく、又溪水懸て瀧を成し、綠樹深く林をなす等、自然の景狀は亦濃厚の質を成すに足るべし、畿内平地に接する大和河内和泉の山地の如きは平地と、僅に地を隔て人質の淳朴なるは別天地の想あり、人國記に大和芳野山中の人は別に畿内中に稀なる潔白の情ありて率直なり、是れ神武帝始めて都を建て代々の都なりしを以て國俗之に倣ひ、自然功名を貴べりと、南朝三世の鳳輦を駐め給ひしも、偶然にあらず、濃飛高原の人は質は頗る朴直、其高山は繞らすに峯巒を以てし、風致甚だ京都に類し、人亦溫雅なり、世或は之を小京都と云ふ、信野に亘るの山地は、人情朴直強毅なり、然れども所々の窪地は近

東北山地

來頗る發達し人質從て伶俐となれり、東北の地、中央火山脈に沿ふ高地の人は淳直勇果なれども野鄙なるを免れず、又火山性峻峰の間に存するを以て人質も亦稍尖峭狷介の風あり。

丹波丹後

中國の丹波より石見に亘れる高地は峰甚だ高からざれども山彙深く交通便ならざれば人情質朴なれども偏狹なり、中國東部の如きは古都に遠からざるを以て只都華の弊風のみ波及せり、人國記には山間に居ながら都に近きを以て輕薄を覺ゆ、伯州の如きは物に忍耐ならず而して雲州は勤勉なり、又長防は健義にして思慮深く音聲も下調にして人に應ずるにも思案して對ふる風あり、互に人頼みにして遠慮過ぎたりと云へり、○四國の山地は實直にして健義あり

長防

土佐

肥薩日隔

土佐は氣質極めて眞あり(人國記)○九州東南部の山地は總て勇を以て經とし健を以て緯とし眞率を以て表とす、人國記に薩摩は剛強にして常に床の上に病死するを憾とす、殺伐の場に死するを本意とし子孫も之を榮名とせり、故に理非を辨するの心少きは遺憾なりと云へり。

四國の光景
人質

總て天然の地形風土は獨り有形の事物に影響變化を與ふるのみならず、又人間心情の無形的に感化を及すものなり、世界の例に就て之を見るも印度人の想像力に富み恐怖驚愕等の情強きは天然地形の雄壯にして印度人の能力能く之を理解すると能はざればなり、歐洲人の理解力に富み進取勇爲の氣象熾なるは自然形勢の人類推理の範圍内にありて能く之に打ち勝ち却て天然力を應用し得べきの氣慨

日本人質の優美

あればなり、我邦土たる絶漠至大の形勢にあらず、芙蓉峰の美觀、瀬戸内の好景、宛然たる畫圖にして、恐怖に陥らしむべき原因一もあることなし、之を以て眞摯、優美、厚諒、等美なる節操は我民種の腦裏を一貫して、殆ど日本人特有の氣質となり、二千五百餘年の久しき未だ曾て外國に於て見るが如き革命争亂を生じ、殘忍酷薄なる倫理破壊の出來事は少なかりき、然れども我邦人の弱點も亦多くは其間に伏せり、何ぞや沈重、忍耐等總て持續の性に乏しきこと是なり、抑我邦は有名なる火山國にして、火山破裂の害、地震蕩搖の災は古より枚擧に違あらず、該の天然力は、大に我邦人心に影響し、粗雜にして事に耐へざるは、恰も地下火氣の鬱窒して時々其憤りを洩らすに異ならず、其地震に至りては、不時に幾多

火山氣質

日本人の好尚

の生命財産を擧げて、蓋燼し去るを以て、居常不安の情は遂に養ふて性となり、事を永久に持續して其必成を期し、我にして若し成らざる時は之を子に傳へ、子にして就らずんば之を孫に傳ふるが如きは稀なる處にして、必ず之を我の一世中に遂げんことを願ひ、只其成就の早からんことを希望するが如きは、本邦人の特性なるなからんか、邦人の須らく用意すべき處なり。

風俗

風俗とは各地其風土に應ずる習俗を指すものなれば、風俗の如何に據りて其地風土の如何をトし得べし、我國の風俗は古より實着なる自然風を貴ひ、華美に裝飾する風習は務

めて之を避けたり。本邦人の彩色の嗜好に徴するも艶麗なるよりも寧ろ幽婉なるを尙び濃厚なるよりも却て淡泊を愛せり。又西洋に於ては家に珍品奇物を有すれば成るべく衆人に示すの風ありて賓客を招く席上にも家藏の重寶は之を陳列して誇るの習ひなれども、我國風は全く之に異なり。縱令家に巨萬の重寶を藏するも、之を秘藏品と稱して容易に人に示さざるのみならず、成るべくは虚しきが如き風を装ふを常とす。衣服を製するにも表面は綿布の質素なるを用ゐ、裏面には却て絹布を用るが如し。此所謂地味を貴ぶの極、世の粹人とも稱せらるゝ人は却て奇癖に陥るに至れり。

天然と美術

質素質素

我國風俗の斯く質素朴實の風を貴ぶに至りし由來は、我國

土の光景之を以て然らしめたりと謂はざるべからず。抑我國山水の景致及四時の風光は皆悉く優美の粹にあらずるはなく、到底人工の企て及ぶ所にあらず。實に天地自然の美なり。此自然の美を有する風土にして豈に又拙き人工を加へて華美を飾るを要せんや。との觀念は古來我國人の有する所にして、此美術的配合作は發して我國風を作りたる所以ならん。

古昔の衣服

衣。我國衣服の制、上古は他の未開國と一般樹皮獸皮等を用ひたりし。樹皮は之を「ユフ」と稱へたり而して其製は筒袖袴なりし。是れ氣候の然らしむる處と、山に獵し海に漁する等働作に便なるより出でたるものなり。仲哀天皇の時繪綾、新羅絹等渡來してより貴人始めて之を用ゆるに至れり。

衣服の變遷

後韓唐との交通頻繁なるに従ひ其風に倣ひ潤袖着袴スベテにして冠を戴き靴を穿ちたり、
 足利氏の頃綿草の舶來せしより我國の衣服には一大變化を來し庶民競ふて之を採用することとなりし從來衣服の原料は蠶糸、楮、麻、芋、葛羅、獸革等に仰ぎしかば貴族は嚴冬の防寒には眞綿の衾を用ひたり、されど庶民は絹布、眞綿等容易に得ること能はざれば寒衣は藁、蒲花、斑枝花の類を入れたる紙衾を以て纔に寒氣を凌ぐとなりし、綿花種渡來後は盛に之を栽植し、一般に防寒の具整ふに至れり、近世に及びては博多織、金襴、縹珍、緞子、縮緬、繡、天鵞絨の類悉く備はり、婦人の帶幅及振袖の長け等頗る優長となり、男子の衣服には肩衣及袴の畧製なる上下次第に行はれ、又羽織袴の如き

衣服定例

も一般に流行するに至れり。
 衣服着用の制も期節(即ち氣候)に應じて其定例あることとなり、四月一日(曆陰)より五月四日までは袷を用ひ、五月五日より八月末日まで帷子を用ひ、九月一日より同八日まで再び袷を用ひ、九月九日より翌年三月末日までは綿入を用ゆるの定例なりし。

近今の衣服

特に最近歐米と交通以來舶來品は世人の珍重する所となり、羅紗リョウサ、猩々シヨウシヨウ、緋、羅背板最も翫賞せられ洋服の如きも一時に流行することとなり、正禮の制服は洋裝に改められたり、故に學校、軍隊、警察等制服ある者は、六月一日乃至九月三十日を夏服とし、十月一日乃至翌年五月三十一日を冬服とするの例となれり。

婦女の服装は頗る變遷を経たり、近古まで禮装には褂袍カフタンを
装け、裙袴カフタンを着けたれども、近世は上流を除く外は殆ど全く
廢たれ、白襟紋付、或は洋装を以て禮装とす。埃國博士、スタイ
ン氏は、褂袍、裙袴の装を以て、服飾の雅醇なるものにして品
格を有し、莊嚴ある世界稀有の服装として、之を歎賞せり。近
年女學生には裙袴の風漸く行はる。

食。食物は身軀營養の基本にして、國土及氣候に應じて著
しく差別あり、例へば寒地エスキモー人をして淡泊なる植
物性の食料をのみ採らしめば、終に生存し能はざると同し
く、暖地なる印度人をして寒地人と同しく獸脂を食ひ、魚油
を飲ましむることは到底爲し得る所にあらず、是れ全く氣
候に應ずる身體の營養作用より生ずる自然の現象なり、夫

れ亞細亞の重なる諸邦は溫暖の地なり、故に亞細亞人が多
く植物性の食物を採るものは氣候自然の然らしむる處た
るのみ、特に亞細亞南部諸國は夏期に至れば多濕なる西南
氣候風流行し、所謂梅雨沛然として降り續き、之れが爲めに
田圃水を以て浸され、稻禾油々として生茂し、頗る米作カサネに適
せしむ、即ち米は氣候風産物なり、是を以て氣候風諸邦の住
民は米穀を以て第一の食料とし、米食人種の名ある所以な
り、故に食米は亞細亞諸邦住民の好嗜のみならず、此好嗜を
養成せしは、其國土の溫度及氣候とによれるものなり。

日本は氣候風地なれば、古より瑞穂の國と稱して、國土の稻
作に適するにより、多く水田カサネに稻禾カサネを作るを以て常業とし、
米作には有名なる國なれば、古より常食には重もに米カサネを用

穀食

日本人食糧の割合

ゐたり、而して古は玄米を蒸し強飯となし、朝夕の二回に食せしものなり、其後姫飯と稱して釜鍋に煮ること行はれ始めて現今の如き普通の米飯を食するに至れり、又耕作の法次第に發達するに従ひ、米の外、麥、粟、稗、豆等の穀類も多量の收穫を見ることとなり、下等の民は此等を雜食し、近世に至りては甘藷も亦多く下民の食料となる、今神苑會に於て算定せる我邦人の常食の割合を示せば次の如し。

我國人民の日々食料に充つる品物中重なるものは米を第一とし、麥、雜穀之に次ぐ、其外薯類、蔬菜、海草、木實等を食するものあり。

此等の品物を四分して其割合を見るに百分中米は五十一分、餘麥は二十七分、雜穀は十三分、餘其他は八分、餘に當れり

肉食

と云ふ、此割合を以て明治三十二年末の人口四千三百七十六萬(臺灣を除く)に配當すれば、米食するものは二千二百三十一萬、麥を食するもの千八百八十二萬、雜穀を食するもの五百四十萬、其他の諸種合せて三百五十萬人なり、之に依りて我邦人食料の如何を知るべし。

穀物の外古より魚介類、鳥獸肉をも食用とせり、特に古は獸肉盛に行はれ、重にも牛、豚、猪、鹿等を食したり、従つて牧畜も行はれ、牛は其肉を食し、乳は之を搾りて牛酪に製することをも行はれたり、佛法傳來後其教義に基づき殺生を禁ぜしかば肉食の風大に衰へたり、是より只魚肉のみ啖ふの習俗となれり、鎌倉時代に至りては、再び肉食の風盛に行はれたりけん、彼の穴戸市と唱へて武人等が多人數群集團坐して

近今の食料

好みて猪鹿の肉を啖ひしと謂ふことあり。維新後飲食物も歐米風大に行はれ、器具となく食饌となく、上流社會には歐風勢力を加へ、肉食は一般に流行することとなり、都會は勿論各地に至るまで牛肉、豚肉、牛乳、麵包等の如き需用次第に増加し、特に衛生論は一層の勢力を増し、洋食論益、其聲を高め、飲食物も稍變革せんとするの傾向となれり。

氣候と住家

住。我國は溫帶圈内に位し、氣候固より溫暖なれども、他の同緯度の地に比すれば寒暑稍懸隔せるを以て、此氣候に應ずる家屋は其構造も亦冬は溫度を保つに適せしめ、夏は清風自然に流通すべき建築ならざるべからず、是を以て我國家屋の構造たる自然に此氣候に應ずべき築造法なり、即ち

地震と家屋構造

家屋は南面して室内總て開通し、内外を隔つるに蔀及障子を以てし、風雨を防ぐには雨戸を鎖し、冬は紙障を用ひて寒風の襲入を防ぎ、以て溫暖を保たしめ、夏は紙障を除きて涼氣の流通を自在にし、清風坐間に到るの快あらしむ、彼の洋風家屋の如き窓戸狭き寒國風の家屋とは其趣きを異にせり。

本邦の木造家屋

我國の如き地震多き國の家屋は、此天災に應ずる構造たるべきは自然の勢なり、中央亞米利加の地震地方にて輕き物料を以て家屋を造くるが如く、本邦家屋も煉瓦石造の家屋は之を避け、木材を以て結構し、屋根も多くは板葺、若くは草葺なり、日本家屋の木造なることに就て他の原因は、即ち我邦は到る處山林多く樹木に富むを以て、家屋結構には土地

自然の産品に傾く常態なれば、夙に之を撰みたるものなり。夏秋の交、我邦を吹き荒らす暴風も亦家屋構造に一の影響を與へたり、現に神社の棟に置く千木、鯉木なるものは、古は普通家屋の棟にも之を設け防風の用とせりと、又破風の如き暴風地の標とも謂ふべきか、又暴風地以外の家屋は高厦亭々三層より四層若くは五六層に至るものあれども、我邦普通の家屋には絶て斯る高層の家なきは暴風の害を避けたるものなり、就中琉球の如き暴風の猛烈なる地は家屋特に高きを得ず、我邦に高樓の少きは建築術の進歩せざりしにあらで、只風害を避くる爲なり、高厦建設の術に達せしとは彼の天守臺若くは高塔、伽藍等の古より處々に存在するによりて知るへし。

次に本邦各地の風俗の差異を概示すべし。

- 本邦人は概ね米を常食とすれども、農民は麥を混するもの多し、九州の粟飯、奥州の稗飯、北國の大根飯、薩州其他には甘藷飯等あり。
- 北海道人は魚肉を常食として熊を食ひ、沖繩人は甘藷を常食として蘇鉄實を食ひ、臺灣人は水牛を食ひ、其生番は虫類等を食ふものあり。
- 北海道人は筒袖なるアツシを緊着して束帶をなし、沖繩人は芭蕉布等の寛裕なる物を着けて殆ど束帶せず、臺灣人は支那服を纏ふ。
- 北海道人は男女共に蓬髮肩を被ひ、鉢巻を以て之を約し、沖繩人は男女共に髪を結び、身分に應じて金、銀、眞銅の簪を加ふ、臺灣人は男は辮髮にして、女は束髮し、生蕃は被髮せり。
- 北海道人の男は鬚髯を蓄へ、女は唇邊に髭し、臺灣婦人は纏足の奇習あり。
- 北海道人の家は流水を以て構へ、削り掛けを立て、熊の頭骨を飾り、沖繩の家は低くして颯風を避け、臺灣の家は煉瓦造なり、北國の家は瓦を用ひず、茅板木皮にて葺き、市街の家は板にて葺き、石を乗せ、中仙道の家屋は棟高し。

宗教

宗教の起源

天然力と宗教

各國人民各信奉する所の神ありて之を尊崇するの習俗あり之を宗教と云ふ此の習俗は初め人の感情と其地天然の景状との間に起る結果なり抑自然の形勢壯大にして理解力の及ばざる偉觀に逢へば徒に天然力の壯大に驚愕し此驚愕は不可思議の念となり不可思議の念は又變じて遂に恐怖の感を惹き續て種々の想像を逞ふし妄想百端終に斯る壯大雄偉の天然力は必ず人間而上の有力者ありて之を創成し且つ支配するものなるべしとの念を起し人力の及ばざる所は此の有力者に依て之を達せんことを願ひ爰に人間而上の有力者即ち神なるものを尊崇するに至る是を

火山作用と
諸迷信

以て亞細亞洲の如き天然力の發達壯大にして又其地貌の雄偉なる地方に在りては宗教夙に其源を茲に起したりされば現に世界人類の信奉する重もなる各宗は盡く亞細亞洲より主唱せられたり佛教及婆羅門教の印度に於ける基督教の亞細亞土耳其に於ける回教の亞刺比亞に於ける皆其起源は亞細亞洲内にあり。

日本の地形は到る處風光優美にして恐怖すべき深山大澤なく又驚愕すべき幽壑深谿なく宗教觀念を起すべき形勢にあらずと雖他に古人の想像を刺撃したる者なきにあらざりき我國は地火力作用の劇しきを以て有名なり此作用より起る恐怖の念は我國民を驅りて妄想に陥らしめたり地火力作用の中特に烈しかりしは火山作用(火山作用は今より昔は數層劇烈)

火山と神話

なりしと)是なり、即ち各地高山の頂上よりは、猛熱を噴き濃烟を揚げ時としては轟然一爆天地を撼かし熱漿を漂はし土石を雨ふらすの猛力は、逆も古人の理解に及ぶ所にあらず。是を以て此災害を恐るゝの極、斯る山嶺には必ず神の存在するものにして、其爆發するは山神の怒りて人類を懲罰するものなりと妄想し、之を祭りて其怒號を緩め災害を免れんことを祈り山岳を崇拜すること一般の風習となり、火山には何れも神號を奉呈し、淺間大明神、霧島神社、阿蘇大明神、富士神社、御岳神社、白山權現等と稱し著しき大火山は今も尊信薄からず、斯る習俗は火山地方の常にして、彼の古昔羅馬人がエトナ火山を以て大鑄鐵場を有する火神なりと妄想し之に(Vulcanus)の名を奉り遂に今の(Volcanoes)に轉訛して

地震と迷信

以て一般火山を稱するに至りしが如し、斯る迷信は火山國の特質と謂ふべし。我國の如き地震國は又地震なる天然力を恐怖するの念遂に一般の宗教心を厚からしむる原因となることあり、地震は實に不意の地變にして忽ちにして大地震搖し地裂け山崩れ人命財産を盡し去るを以て古人は其理由の不可思議に驚き其力の強烈なるを恐れ、恐懼に陥り、最初は此地變力を以て鬼神の所業となし、爰に迷信を惹起し爲めに宗教の勢力を逞ふするに至ることあり、伊太利、西班牙、葡萄牙等の如き地震國は土人の妄想頗る熟し僧侶輩は之に乗じて宗教の地歩を此地に固め而して其迷信も亦最も永く此等の地に行はれたり。

又夏秋の交に起る暴風なる自然力も亦迷信を誘起し是を一の悪神の所業となし風伯風神等の語をなすに至れり又雷電の如き現象も古昔は之を神業とせし等は各國皆同一なり以上述べし所は我邦人の古昔の迷信にして此等の迷信は幾分か宗教の基礎を建設せしに相違なしされど我邦は前に述べし如く嵩岳禱蒼の裏仙神を棲ましめ溪壑幽暗の底蛟龍躍るの怪異を恐るゝの念なし要するに多數の國民は人間以外に鬼神なく神は即ち吾人の祖先なりとの觀念を起し祖先を尊敬するの事起り之を現はすに太陽太陰又は最も威嚴ある人體を以てする事とし彼の諸外國に行はれしが如き不可思議且つ恐懼すべき鬼神等を信すること少なし是を以て我國人の最も多く奉祀する神々は只其威

徳を追崇すべき靈位にして第一皇祖大日靈尊は我國土開闢の尊にして神徳光彩四維に照徹するにより之を日神と奉稱し天照皇太神として奉戴するは一般の事なり又應神天皇の威武を崇尊して八幡大神として之を奉祀し次に菅原道真朝臣の如き誠實有徳の人は之を天満宮として村里之を祭り又加藤清正朝臣の武勇絶倫なるを崇んで之を清正公大神として祭るが如し我邦の神は皆其徳を尊んで之を奉祀するものにして幸運を祈り若くは身後の冥福を願ふものにあらず故に神道は一般宗教とは其趣を異にせり現今神道に屬する教會の數は五千三百餘所にして信徒は一千五百七十萬人と注せらる。

然るに一千二百代に至り我邦人心上に至大の影響を與へ

佛教各派の

眞宗
分布

眞宗

しものは佛[○]教[○]の渡[○]來[○]是なり抑、佛[○]教[○]は天然力妖怪の府と稱せらるゝ印度に於て多年研究を経たる玄理にして其説く所頗る幽遠なるを以て流石に淡泊なる我國民も靡然として之に向ひ、中[○]古[○]に至りては益々旺盛にして遂に始んど宗教は佛[○]教[○]之を專領するの傾きとなり、其餘勢今日に及び佛[○]教[○]國を以て目せらるゝに至れり、此佛[○]教[○]も年所を経るの間自ら流派を生じ現今まで専ら世に行はるゝ佛[○]教[○]の宗派は、天台、眞言、淨土、臨濟、曹洞、黃檗、眞、日蓮、時、融通、念佛、華嚴の十二宗となれり、其外の宗教を合すれば總て四十一宗派あり。

佛[○]教[○]各[○]宗[○]の地[○]方[○]的[○]播[○]布[○]に就て之を觀るに、信徒の最も多きは眞[○]宗[○]にして寺院殆ど二萬宇に近し、此宗の創唱者なる親鸞は、近畿に於て主唱し續て北陸地方に泛せられたるを以

曹洞宗

眞言宗

淨土臨濟

日蓮宗

て、此等の地方最も能く行はれ、大阪、滋賀、愛知、岐阜、三重、兵庫各府縣より北國にては福井、富山、新潟の各地に亘れり、又九州にては福岡を多しとす。次に曹洞宗は寺院一万四千宇を有し、其播布は重もに本州の中央部を領し、静岡、愛知、山梨、埼玉、長野、新潟、山形の各縣は其最も播布せる處なり。○眞言宗は一萬二千餘宇あり、其本據なる紀伊を始として東國（千葉）、埼玉（神奈川）、福島（福島）、中國（兵庫）、岡山、及越後等に偏く行はる。○淨土、臨濟二宗は重もに近畿諸國に多く、○日蓮宗は其祖師なる日蓮、東國に於て主唱せしを以て、總房諸國は信徒甚だ多く、且つ熱心に之を奉ず、又其本山なる甲州は信徒多く、總て關東、八州は此宗の最も勢力ある地方とす、其他各宗の播布の區域も自から差違あれども以上各宗の如く著しからず。

佛敎の地方的配布

佛寺の數は七萬二千に達し、佛敎の信徒は其概數約百五十餘萬人に及ぶ、今其播布に就て之を見るに、全國中最も盛行はるゝ地域は近畿にして、山城、近江を中心とし、北は越前に延び、南は紀州に至れり、而して其東は美濃、飛驒の高原に及び、鈴鹿山脈を以て限られ、之を踰へて東は著しく減少せり、又其西境は中國山脈の東端を以て境ひせられ、淀川も亦この限境線となれり、此域内は古來中央部附近にして佛敎も多く、此地に主唱せられ、天台、眞言、臨濟、眞等の如き勢力ある宗派は此域内に起れり、故に寺院信徒最も多く、寺院は人口平均二百毎に一寺を有し、山城の如きは人口一百七十人毎に一寺を有するに至れり。

佛敎隆盛地

甲斐、上總、對馬も佛敎盛なる地にして、甲斐、上總に日蓮宗の

佛敎不繁昌の地

信徒多く、甲斐は四境山を以て圍まれ、播教區域も又此内に限り、寺院は人口百五十三毎に一寺を有せり、對馬は古來渡韓の途に横たはり、佛敎傳來の當初より直に之を信したる故に寺院甚だ多し、以上各地域は佛敎最盛の區とす、佛敎の播布は中央佛敎區域を距る遠きに從ひ、頗る減少し、遂に九州の南端及本州北端の兩極端には佛敎最も不繁昌の地あり、九州西部は何れも人口一千以上に一寺を有し、肥後は一、千一百人毎に、大隅は二千三百人毎に、薩摩は一萬五千人毎に一寺を有せり、本州の北端も亦同じ、陸中は一、千四百人毎に、陸奥は一、千四百人毎に一寺を有せり、以て佛敎の播布が山脈及交通等に關せしことを見るべし。

基督敎の渡來

基督敎の初めて我國に輸入せしは、既に足利氏の末世にあ

新教の勢力

りて天主教と稱して羅馬舊教を傳へ、一時九州畿内に播延せしが、其後執政者は之を我國に不利なりとして嚴禁せしが、明治維新の後は此禁を解放せしを以て海外事物の輸入と共に漸次侵入して今は稍其形ちをなすに至れり、且つ宣教師の熱心に布教に従事すると一般氣運の傾向とによりて益、播延の勢を現はせり、其内新教(Protestant)最も行はる、基督教會堂の數は全國に殆ど一千ヶ所に及び其信徒數は約十萬人に達し、基督教學校百三十校、生徒約一萬人あり、其播布の重なるは外人に接する最も多き地方にして東京及開港場を以て最も行はるゝ所とす。

基督教は外交の餘波なれば總て港灣より輸入し來りし遺跡を存す、即ち本州三箇の海灣より侵入したるを見るべし

基督教の分布

第一は大阪灣、第二は東京、第三は仙臺灣是なり、第一大阪灣より輸入したるものは神戸を中心として其灣邊より近畿諸國中國南部に播布せり、第二東京灣より輸入したるものは、京濱の間より越へて兩毛地方に及び、遂に本邦第一の最盛地となれり、第三仙臺灣より輸入したるものは、仙臺を本據として其四近に播布せり。

佛教と基督教の衝突

基督教の播布は佛教と相衝突せるの傾あり、即ち佛教の播布既に盛なりし地は其信徒數著しく少し、基督教は中央佛教區域を避けて其兩際に行はれ、又甲州の如き佛教地には甚だ少し、九州及本州北端の如き佛教の振はざる地は、比較的基督教の多きを見るべし、北海道の新野は殆ど基督教の領地なるが如し。

山岳崇拜

信州、甲州、上州等高峻なる山岳多く、若くは火山作用盛なる地方は、神佛混交的山岳崇拜者多く、道士道者、杯稱する者ありて一の團躰を作り、富士講社、淺間講、眞誠講社、或は御岳講社等と稱し、相率ゐて登山參拜するの風習あり、又千箇寺禮拜、或は三十三所巡禮と稱し、彼の印度が「んぢす」河畔巡拜道者に倣ひ、各地の靈場、或は巨刹を巡拜する者あり、此風習は四國の阿波伊豫を最も多しとす、故に四國巡禮の名あり、又海國風として、金比羅宮、水天宮の如き水神の尊信厚く、中にも金比羅宮の繁榮最も甚し、武州兩總及其他關東地方は不動を尊崇する風あり、成田不動の如き、其最も有力なるものなり、是れ又宗教上一の地方的風習と謂ふべし。

巡禮

金比羅

不動

教育

國及時代に於ける教育方針

國家固有の風習は、教育法の如何によりて形づくらるゝものなれば、各國民が其兒童を教育するの有様は、直に其時代其國民が有する觀念、生活の程度、及其性質を現はすものなり、されば將來其國民が進歩すべき針路及生活の如何も亦其教育法によりて豫め之を知ることを得べし、故に人情風俗と教育とは其關係親密にして離るべからざるものとす、然り而して教育は時代によりて變遷すべきは勿論、又各國天然の地理に關して其取るべき方針及進歩に差違あるを免れず。

教育と本邦地勢

教育に對する我國の地勢、氣候を述べんに、東洋の表に位す

地形

る島國にして、或は海水深く、浸入して灣となり、或は陸地遠く突出して岬となり、海岸線の出入多き世界中、其比稀なり、而して嶋嶼の散在も亦甚た多し、且つ内地の地形も、綠山翠峯相亘り、河流其間を通じ、平地は肥沃にして、田圃相望み、穀麻油々として、茂り、天然の風景、畫圖も及ばず、されば常に此土地に起臥する國民の氣質は、自然に快活多趣の風を帶べり、加ふるに國內山脈の配置によりて、土地も種々に區別せられ、各部獨立の姿を備へ、互に相競争進歩するの傾あり、又其氣候は寒暖中を得、炎熱の人を怠懶に陥らしむるの威なく、寒氣の人心を萎縮せしむるの慘なし、是を以て國民は自然の發育を障害せらるゝことなく、自ら調和の生活を貴び、心身共に整合頓正し、一方に偏せざるの發育を貴ぶに至り、

氣候

明治の教育

其氣象は自ら勤勉の氣力に富み、自信の念淺からざれども、然も頑固ならず、一般に鋭敏にして、能く外圍の粹を抜き、純を集め、又外界の必要に應ずるの機能機能を有するを以て、活潑多種の發育に適する國民たること明なり。

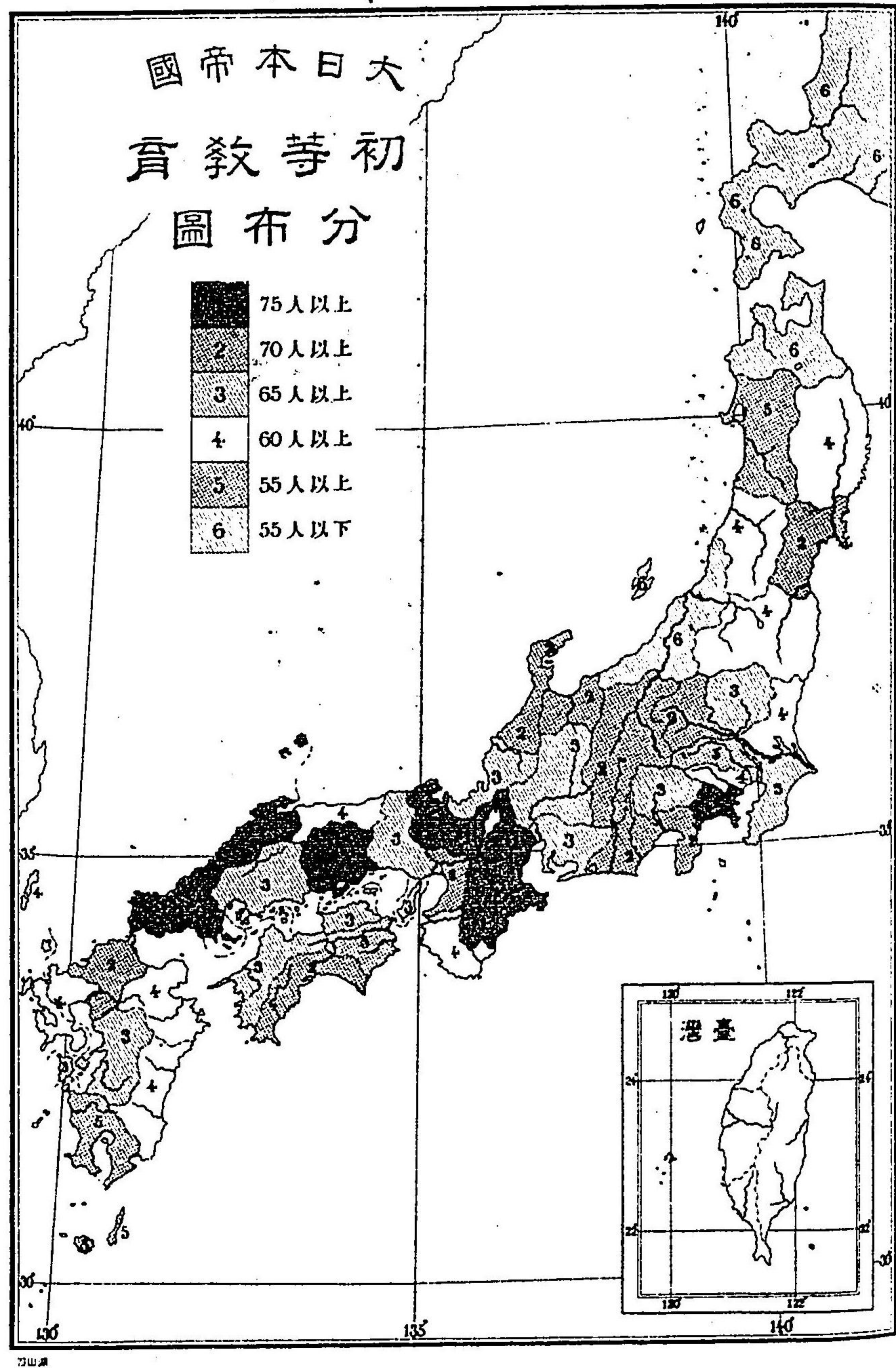
維新後の教育 我國の地勢風土は以上の如くなるを以て、子孫教養の法も夙に發達し、時に隨ひ一盛一衰は免かれざりしも、教育沿革は暫く之を措き、明治維新以後の教育の景況を述べんに、王政維れ新なるや、朝廷先づ教育學問を獎勵せられ、明治の初年、京都に大學寮代を興し、長崎、大阪等にある舊幕府所建の學校を再興し、江戸鎮定の後は、舊昌平黌醫學所及開成所を復興し、四方の學者を集め、學官を置き、府縣學校取調局、史料編輯、國史校正局を昌平黌に置き、反譯局を

大中小の學制

開成所に置かれたり、次で昌平黌を大學校と改む然れども大學以下の學制は各地異にして一定の規なし、是に於て始て大[○]中[○]小[○]學[○]の規則を編制したり、明治四年大學を廢して文部省を置き、全國教育の事務を統轄せしめ、師範學校、女學校、書籍館、博物館をも創めたり、尋て學制を頒布し、特に 聖諭を以て教育の普及を示し給ひたるを以て、全國靡然として學に向ふの風をなし、明治十年東京大學を置き、法、理、文、醫の四學部を設く、是れ我邦教育の一進歩の時期とす、明治十九年に至り大に教育上に改革を施し帝國大學令によりて東京帝國大學及大學院を設け、次で京都帝國大學を置き、師範學校令に依りて東京、廣島に高等師範學校を、各府縣に師範學校を置き、高等學校を東京、仙臺、京都、金澤、熊本、岡山、山口に

教育の主義方針

置き、中學校及高等女學校を各府縣に設け、小學校令によりて初等教育の普及を計り、商業學校、工業學校、農林學校、醫學校、農學校、徒弟學校、實業補習學校、技藝學校、女學校、其他の私立諸學校は東京を始め各地に勃興せり、又生徒の氣質養成に關しては兵式體操を採用せり、教育の施設に關しては斯の如く整備せりと雖、外交以來洋風の流行は一瀉千里の勢を以て浸入し、人々智識啓發の一點にのみ忙しく、德義の感念の如き從來とは其趣を異にするに至れり、是に於て或は國家主義と云ひ、或は儒教主義と云ひ、或は泰西主義と云ふ等、道德上一定の標準なく、德育の點に於ては頗る缺如せしが、明治二十三年十月教育に關する大詔一降以來、茲に臣民の分とし、又父子兄弟夫婦及朋友



幼稚園

近今教育の
振興に學校
及學生

として各守る所を垂示し給ひしより道德の基礎愈確定するに至れり民間に於ても亦道德論頻りに起り或は男子品行論或は女徳論等唱へられ福澤諭吉翁の修身要領の如き又頗る風教を補へり。

現今の學校の數は全國に二萬八千餘校ありて之れに従事する教員約八萬四千人又教養する學生生徒約五百二十萬人あり之を學階に種別すれば小學校二萬七千校教員八萬人生徒四百九十萬人あり中學校約二百校教員二千六百人生徒六萬二千人あり師範學校四十七校教員八百人生徒壹萬人あり其他は專門學校各種學校女學校等なり以上諸學校に要する經費毎年殆ど二千萬圓なり。

學校の外各府縣に幼稚園の設立ありて全國に二百二十餘

著述、新聞、
雜誌

(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	例	就學	者	百分	比
石	岡	神	奈	三	京	山	島	表	表	率	百	分	比
川	山	川	賀	重	都	口	根	長	表	率	百	分	比
七	七	七	七	七	七	七	七	七	〇	〇	〇	〇	〇

園に及べり、又一般の閲覧に供する圖書館の設立も漸く其數を増し、東京を始め各府縣に通じて館數三十餘、其圖書數五十餘萬冊に達せり、隨つて圖書の出版も亦盛にして、毎年平均二萬五千部は出版せらる、又新聞雜誌も近來非常に進歩し、東京のみにては二百餘種ありて、毎年一億七千萬部以上發兌せらる、之を全國に通計すれば七百五十種、一年に無慮四億三千萬部（一人人口に付約十部宛）は發兌せらるゝに至れり、以て我國教育の著しく進歩せるを知るべし。

初等教育の播布 全國學齡兒童の數は、約七百二十萬人あり、内就學者は四百九十萬人にして、不就學者二百二十萬人なり、其の百分比は學齡兒童百名中就學者は六十八名九分一厘に當る、之を各國に比すれば、英國は學齡百分中八十

(36)	(35)	(34)	(33)	(32)	(31)	(30)	(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
崎	島	分	京	手	賀	形	城	媛	庫	知	梨	水	早	島	葉	非	川	木	岡	馬	知	城	野	岡	阪	山
(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)	(六)

六人六にして、佛國は七十七人六なり、又我國就學の比例を男女兩兒に分てば、百分中男兒は八十一人にして、女兒五十一人の平均なれば、女兒教育は男兒に比すれば著しく劣れり。我國初等教育播布の状は頗る差あり、則ち就學兒童の百分率は奈良縣の八十五人より沖繩縣の三十七人の間にあり、先づ之を北日本と南日本とに比すれば、南日本は著しく北日本に優るを見るべし、南日本は平均七十二人なれども北日本の平均は六十三人にして平均に及ばず、南日本の平均以上にあるもの十八府縣あれども、北日本の平均以上に在るは僅に四縣に過ぎず。次に地方によりて播布の状を觀れば、初等教育は近畿に最

(47)	(46)	(45)	(44)	(43)	(42)	(41)	(40)	(39)	(38)	(37)
沖	北	新	青	鹿	秋	埼	德	島	長	和
繩	海	潟	森	島	田	玉	島	取	崎	歌
(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)	(七)

も盛にして、中國之に次ぎ、東海道及中仙道諸國之に次ぐ、九州北部及四國其次に位し、九州南部は頗る劣れり、又奥羽は概して劣等なり、北海道沖繩は固より例外に屬す、近來初等教育の比較的にも進歩せるは、島根、京都、神奈川の各府縣にして、滋賀、福岡、熊本、香川の各縣も亦著しく進歩せり。又男女兩兒に就き就學の状を觀るに、男兒就學の最も多きは奈良、長野、島根の三縣にして、何れも百中八十九以上あり、而して女兒就學の最も多きも奈良縣にして、島根、京都、神奈川之に次ぐ、概して近畿、北國は女兒就學者の數多く、奥羽及九州は女兒就學の數概して寡し、各府縣の學齡兒童(男に女)百分比例は上表に示せり。(初等教育播布圖を看よ) 凡て教育の普及は形勢、風土の關係より交通、貧富の程度等

に關して盛否を呈するものなり、特に初等教育に於ては土地の事情、生計の程度、職業の種類によりて著しく差あり、奥羽、九州の比較的普及を缺くは土地僻遠にして新教育思想の播布遲きに歸すべく、東京、長崎、徳島、新潟の下位に在るが如きは全く其地職業の種類によりて不振なるべく、鳥取、埼玉、青森の如きは生活の程度によるるべし、又舊大藩の地にして藩學の盛なりし地は其餘風を受けて士族社會より一般に及び向學の風あり、斯る所は高等教育をも又進歩せり、兩京の外、仙臺、金澤、岡山、廣島、熊本、福岡の如きは是なり。

衛生

土地と衛生

國の衛生事情は地形風土に關すること親密なり、是れ疾病

風土病

健康地

は、大氣の寒溫、乾濕、天氣の陰晴、土地の高卑、地質、流水等より誘はるゝもの多ければなり、彼の地方病、又は風土病と稱するものは、主として其土地によれるものなり、伊太利の熱病、印度の疫病流行するが如き、北米西岸の健康に適する、佛國南岸の轉地療養地として撰まるゝ等、皆其風土によるなり。日本は世界の健康地、若くは「小兒之樂園」など、稱せられながら、脚氣、レウマチス、肺癆等の流行するは、島國にして多濕なるによる、又一地方に就て言へば九州、四國(今は殆ど全國)に痢病、北國に瘧、岡山に「ダストマ」の流行する亦風土による、又沼津、大磯、別府(後豊)、房州、銚子等の健康地として轉地療養場たるも、其風土によるなり。

斯の如く各地方により健不健の地、若くは流行する疾病と

日本の不健康地

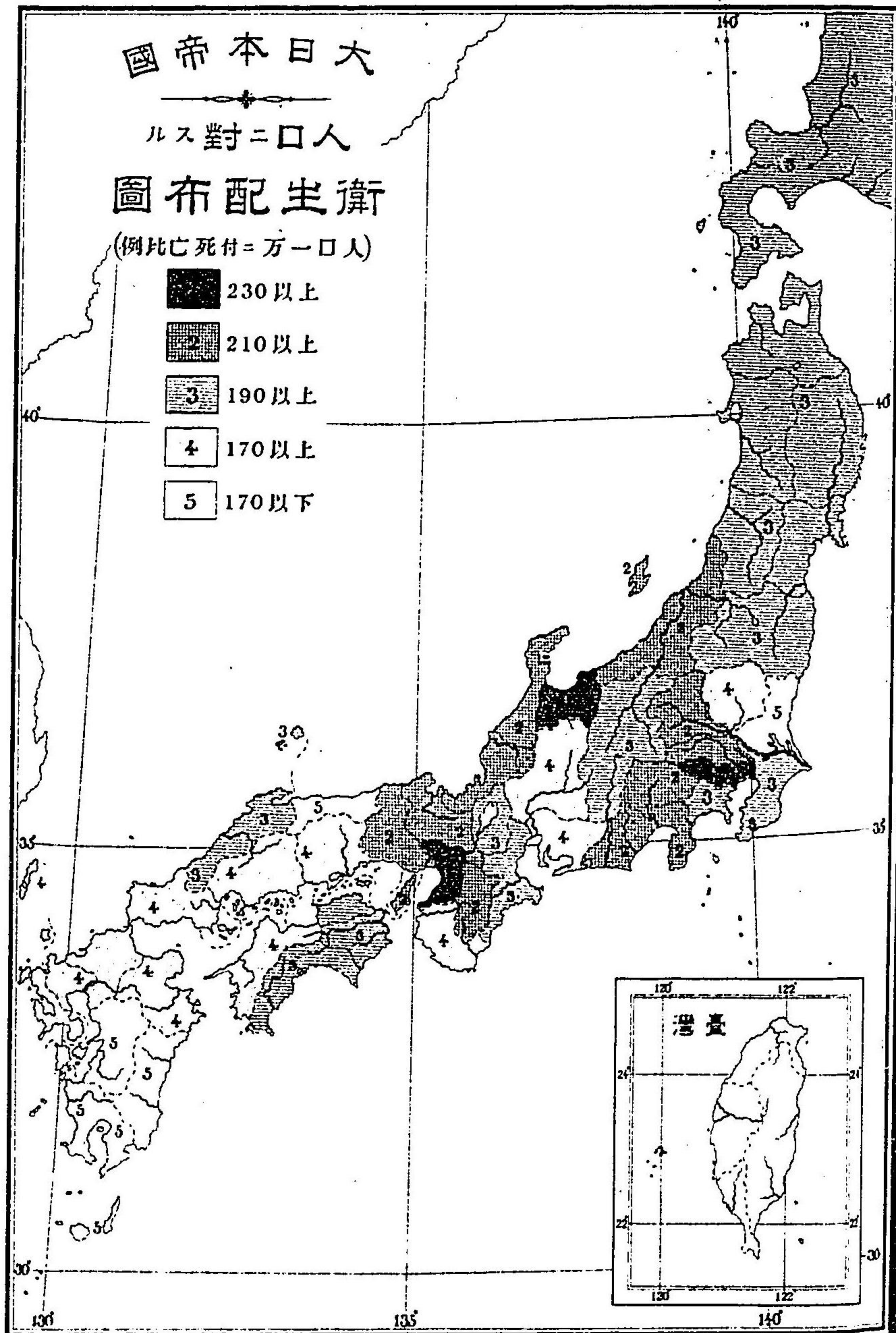
人口稠密地

流行せざる疾病とありて、人口に對する死亡者の多少も此等の事情による、今住民一萬に付死亡比例の多少を觀るに、全國近年の平均は一萬人に付二百人なり、而して最も死亡比例の大なる處三個所あり(一)大阪府(二)東京府(三)富山縣にして、何れも二百三十以上に超へたり、中にも大阪は二百五十六人にして最大、東京は二百三十八人にして之に次ぐ、此兩地は人口稠密より生ずる疾病多く、大阪は呼吸器病、傳染病多く、東京は肺病多し、又富山は風土より來る神経系及五官病最も多く、消化器病、呼吸器病も亦多し、總て人口の粗密、風土の如何は最も衛生に關係ありて、東海道及近畿の人口稠密なる各地は死亡比例多く、夔ふものは神経系五官病、呼吸器、消化器病等なり、北國の多雨地方は死亡比例甚だ多し、

多雨地方

日本の健康地

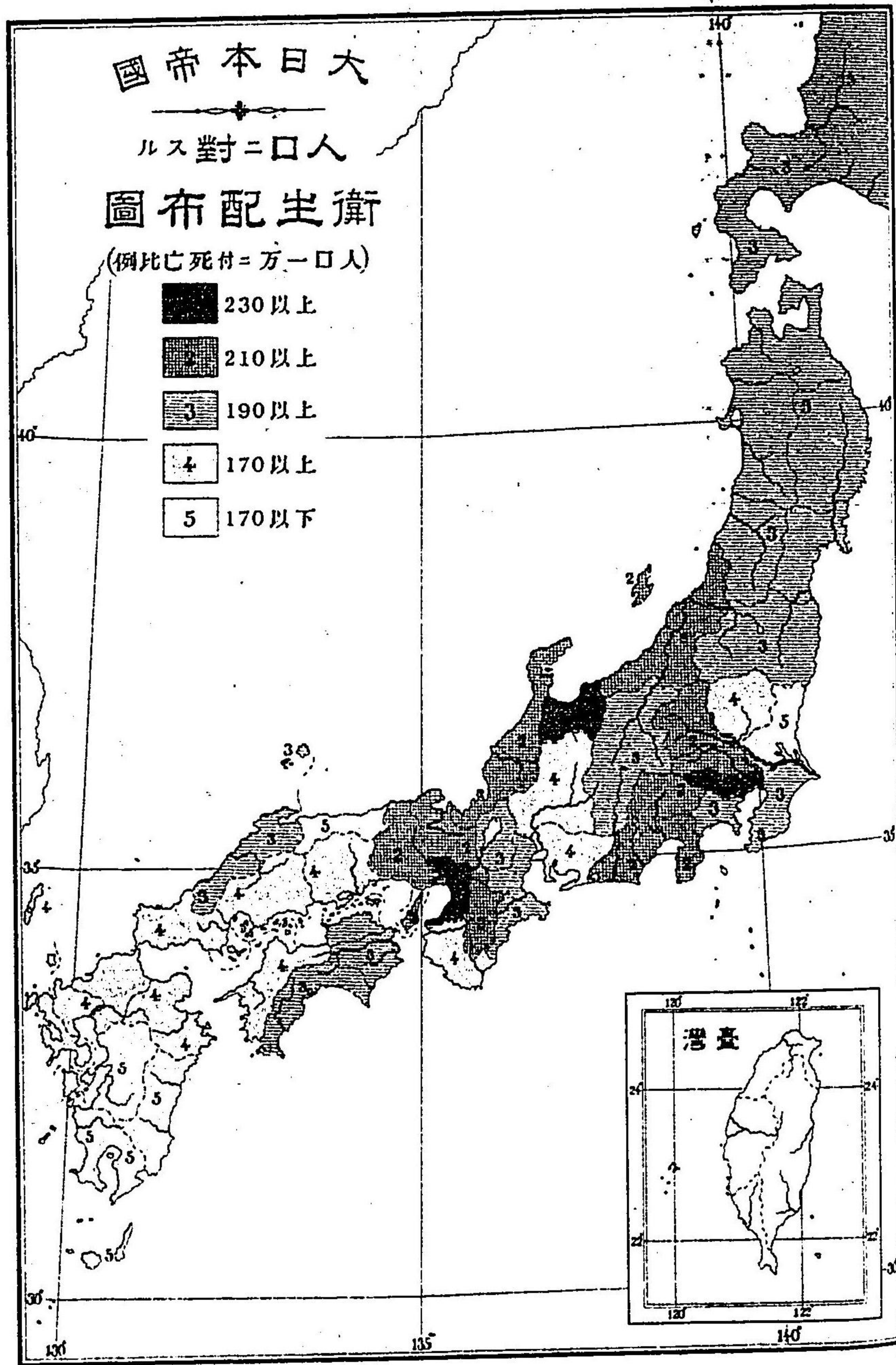
其夔ふ病は消化器病を第一とし、神経系五官病之に次ぐ、是れ雨雪多く運動の缺乏と、多濕なるより來るなるべし、之れと同じく四國の南岸多雨地も比較的死亡比例大なり。之に反して、九州、中國、奥羽は總て死亡比例小なり、是れ重もに交通、人口、風土の關係に歸すべし、最も健康なるは九州南半にして、何れも百七十以下なり、此地は呼吸器病特に少なく、然れども九州北半は較大なり、中國は瀬戸内を圍む寡雨地に死亡比例少にして、山陰道は較大なり、奥羽は土地の比較的には健康地と言ふべからず、次に愛知縣は交通頻繁、人口稠密の中部に位して、死亡比例甚だ少なく、之に續く岐阜縣も亦少なり、茨城縣も交通、人口の事情は近隣の地に譲らざるに、獨り死亡比例甚だ小なり、之に鳥取縣を加へて、本州



國民を害する疾病

季節と衛生

中の最健康地と云ふべし。衛生分布圖を看よ）
 總じて、我國民を害する最も多き病は第一消化器、第二神經系及五官、第三呼吸器の三病にして、死亡者の六割以上は此三病に係る、特に呼吸器病中、肺病は、近來頗る流行し、東京、大阪、福井、徳島、福岡の二府三縣は最も猖獗にして、死亡者の一割以上は該病なり、而して茨城、栃木、鹿兒島、熊本、宮崎、廣島、岡山、兵庫、富山、宮城、岩手、秋田、山形の十三縣は肺病最も流行せざる地にして、死亡者の五分に達せず。
 衛生事情は又季節に應じて異なり、是れ主として温度の高。低。によるなり、即ち温度低き時は死亡少く、氣温の加はるに従ひ次第に死亡數を増加す、曾て東京府に於て調査せし温度と死亡數との關係は別表の如し。



國民を害する疾病

季節と衛生

中の最健康地と云ふべし。(衛生分布圖を看よ)

總じて、我國民を害する最も多き病は第一消化器、第二神経系及五官、第三呼吸器の三病にして、死亡者の六割以上は此三病に係る、特に呼吸器病中、肺病は、近來頗る流行し、東京、大阪、福井、徳島、福岡の二府三縣は最も猖獗にして、死亡者の一割以上は該病なり、而して茨城、栃木、鹿兒島、熊本、宮崎、廣島、岡山、兵庫、富山、宮城、岩手、秋田、山形の十三縣は肺病最も流行せざる地にして、死亡者の五分に達せず。

衛生事情は又季節に應じて異なり、是れ主として温度の高底によるなり、即ち温度低き時は死亡少く、氣温の加はるに従ひ次第に死亡數を増加す、曾て東京府に於て調査せし温度と死亡數との關係は別表の如し。

北清に於ける
 聯合軍の
 体格比較の
 日本兵
 五尺三寸二
 分
 佛國兵
 五尺六寸
 分
 暹羅兵
 五尺六寸
 分
 英國兵
 五尺六寸二
 分
 米國兵
 五尺七寸二
 分
 印度兵
 五尺七寸四
 分

日本人の體格

我國成年男子の平均身長は五尺二寸にして、平均體量は十
 三貫五百目なり、之を平均丈量とす、女子の身長は四尺八寸
 を平均とし、體量は十二貫餘を平均とす、故に歐米各國人の
 體格に比すれば、男女共に劣り、世界中我國人の體格よりも
 劣る處は、頗る稀に特に身長に於ては甚だ劣れり。
 我國人の體格は維新以來漸次劣等に赴きつゝありとの説
 あり、是れ事實ならん其原因は専ら運動の缺乏に歸すべし、
 即ち武道に連關する體育の衰退と、他は交通機關の發達よ
 り生ずる行歩の不足とに在りと認むる者多し、然るに近來
 は學校其他に於ても、漸く體育を獎勵せるの結果は、頗る著
 しき長成績を顯はし、最近十年來は體格上進の傾向あり特

日本國民の
身長は年々
進歩して上進
す

に身長に於ては頗る著明なり、(ひし實例は英米の婦人に於ても見
る)即ち毎年徴兵検査の成績に據れば、明治二十六年以來、壯
丁身長の百分比例は下の事實を示せり、即ち五尺二寸の平
均身長を界として、以上の者は年一年に多きを加へ、以下の
者は、年一年に減ずると左表の如し。

徴兵壯丁百に付身長比例

年次	明治	二十六年	二十七年	二十八年	二十九年	三十年	三十一年
五尺六寸以上	〇・九八	二・五七	六・五四	二二・八七	二八・九二	三〇・八二	二七・二二
五尺五寸以上	二・五七	六・五四	二二・八七	二八・九二	三〇・八二	二七・二二	二五・七
五尺四寸以上	七・三三	二一・〇〇	二九・九二	三〇・八二	二七・二二	二五・七	四・六一
五尺三寸以上	七・三三	二一・〇〇	二九・九二	三〇・八二	二七・二二	二五・七	四・六一
五尺二寸以上	七・三三	二一・〇〇	二九・九二	三〇・八二	二七・二二	二五・七	四・六一
五尺一寸以上	七・三三	二一・〇〇	二九・九二	三〇・八二	二七・二二	二五・七	四・六一
五尺以上	七・三三	二一・〇〇	二九・九二	三〇・八二	二七・二二	二五・七	四・六一
四尺九寸以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺八寸以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺七寸以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺六寸以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺五寸以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺四寸以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺三寸以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺二寸以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺一寸以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺以上	九・九二	二六・九六	三六・〇〇	四一・〇四	四一・〇四	四一・〇四	四・六一
四尺未滿	三・一八	一〇・七	一六・九六	二一・〇四	二一・〇四	二一・〇四	三・一八

右表の示すが如く、五尺六寸以上の大兵は、明治二十六年に

身長の地方
的分布

は、百人中一人に足らざりしが、年を追ふて次第に其比例を
増し、三十一年に及びては、一人二一人となり、其外五尺二寸の
平均身長以上の者は年々に増加せり、之に反し、四尺八寸未
滿の矮人は、明治二十六年には百人の中、四人二ありしが、年
を追ふて次第に減じ、三十年には三人一、二と減ぜり、其外平
均身長以下の者も、年々減少するを知るべし、但し明治三十
一年に至りて、稍反對の成績を見るは、頗る注意すべき點な
り、知らず數年の後、余が本書を訂正する時は、果して如何に
訂正すべく示さるゝや、

又身長の地方的分布は、徴兵壯丁の成績に就ていへば、身長
高きは近畿中國地方にして、岡山縣は最も身長高き者多し、
次に滋賀縣にして、大阪、三重、兵庫等之に次げり、又身長の低

學校生徒の體格

きは新潟縣にして、廣島、福岡の如きも低き者多き方なり。又最近に施行せし文部省直轄諸學校生徒の身體検査成績に據れば検査人員約一萬人にして身長、體量は男女とも年齢の進むに従ひ遞次増加し二十年に至りて頂點に達し以後は増進せず二十年に於ける男女の平均體格左の如し

男 身長五尺三寸五分 體量十三貫五百五十匁
女 身長四尺九寸二分 體量十二貫八百匁

又體格及視力の各百分比例は左の如し

體格	男強健者	四九	中等	四七	薄弱者	二〇
	女強健者	二九	中等	五〇	薄弱者	二〇
視力	男正視	六三	遠視	〇一	近視	一三
	女正視	八六	遠視	〇一	近視	一四

體力の増進するは、二十歳迄なれば少壯者は充分の注意を以て、再び追ふべからざる自然の美を損ふ勿れ。

第三編

邦制

國家

國家と社會との別

國家とは主權ある社會の本躰なり。夫れ人々個々相依り相待ち互に同心協力して一團體となり、始めて人間社會成立すれども、未だ國家を組成せりと謂ふを得ず、其社會に一定の領土を有し、主權ありて一定の制度法規を確立し、有形無形の利害を保護するの組織にして、始めて國家と稱することを得るなり。國家の組織は實に人類に要用にして、國家は一個人の力にして成し能はざる事を成す萬能の權力を有するものなり、人類に國家なく獨力事を成す時は、常に憐む

べき状態に沈淪するものなり、彼の久しく野蠻の境界に停滞する者は主として社會の組織完全ならず、遂に國家を成さざればなり、故に吾人は國家の支配を受けざれば各個の利益を鞏固にする能はず、而して各人の意志、行為は總て國家に委し、一大團結を完成せざるべからず、故に吾人は常に二様の生活をなすことを忘るべからず、其一は普通なる一個人として、の生活、其一は高尚なる國家として、の生活、是れなり、斯の如く各人の相團結して一體となり、始めて社會に於ける眞個の國家を表彰するものなり。

國家は權力の主體なるが故に、國家自存の目的に於ては意思あり、行為あり、而して意思の發表は國會を通じて現はれ、行為の發表は官府を経由して實行せらる、其意思行為は則

個人の生活

國家の生活

國家の意思

國家の行為

ち國家の意思行為の發動にして主權の作用たり、主權は國家の主腦にして國の元首たる 天皇陛下之れを掌握し給ふこと勿論なりとす。

國體

國體は國家組織の原質なり、世界各國、其國家成立の事情によりて各區別あるものなり、國家主權の君主に在るものを君主國體と謂ひ、主權の人民に在るものを民主國體と謂ふ、又均しく立憲國と雖、又二様の差別あり、其一は憲法によりて主權を生ずる國體即ち民主國體と、其一は主權より憲法を生ずる國體即ち君主國體との別あり。

大日本帝國の主權は固より 天皇陛下の掌握し給ふ所に

元首

國體の種別

日本は君主國體なり

日本國體は他の君主國とほ大に異なれり

血族國家

國民一姓

して、大日本帝國憲法は主權の欽定し給ひたる大典なり、故に我國は即ち君主國體なりとす。而して、我帝國の國體たる他の所謂君主國體とは、大に其事情の特殊なるを察せざるべからず。太初我國家の組織たるや實に單純にして所謂血族團欒なり、彼の諸外國に於けるが如く、異種の民族相集りて國家を成したるが如き雜駁なるものとは其趣を異にし、我國民種は初より悉く一種族と謂ふにあらざれども、異種の人民は實に僅少にして、且、既に歷朝の威徳に服し、國民たるの本分に於ては毫も差別ある事なし、故に或は我國を血族國家と稱せり。

我國民庶は悉く一姓とも謂ふべくして、概ね國祖の裔なり、是を以て我帝國の臣民及臣民の子孫は永遠に血統上の關係よりして、天祖降臨以來萬世一系にして至尊至榮なる皇室を奉じ、國家の元首と推戴すべき本分あること、他の君主國に於けるが如く、民種區々なるに漸く一片の理論を以て君主の標準となし、僅に民心を收攬するものとは區別あり、是れ我帝國の帝國たる所以なり。

皇室の尊嚴

皇室 我皇室は國初以來萬世一系の皇統を以て連綿し、天皇は國家の元首にして、土地及人民を統治し給ふ國家主權の御本體なり、故に皇位は憲法によりて確定するものにあらずして、憲法なるものは主權を俟て而して後始めて發生するものなり。

皇位繼承

謹んで皇室典範を案するに皇位は祖宗の皇統にして、男系の男子之を繼承し、皇長子に傳へ、皇長子有らざるときは、皇

長孫に傳ふ、皇長孫及其子孫あらざるときは、皇次子及其子孫に傳ふ、然れども繼承は嫡出を先にす、而して皇子孫有らざれば第一に皇兄弟及其子孫、第二に皇伯叔父及其子孫、第三に其以上に於て最近の皇族とす、皇兄弟以上は同等内に於ては嫡を先にし庶を後にし、長を先にし幼を後にす、而して儲嗣たる皇子を皇太子とし、皇太子有らざれば皇孫を皇太孫と稱し、天皇の崩御に於て踐祚し、皇祖の神器を承け一世の元號を建て、京都に於て即位の禮及大嘗祭を行はせらるゝを例とす。

敬稱
皇族

敬稱 天皇、太皇太后、皇太后、皇后の敬稱は、陛下とし、皇太子以下皇族の敬稱を殿下とす、天皇、皇太子、皇太孫は滿十八年を成年とす、皇族とは太皇太后、皇太后、皇后、皇太子、皇太子妃

皇太孫、皇太孫妃、親王、親王妃、内親王、王、王妃とす、又皇玄孫に至るまで男を親王、女を内親王とし、五世以下男を王、女を女王とす、總て皇族は天皇の御監督に屬し、皇族の身體は特別法を以て之を保護せらる、皇室の經費は別に憲法を以て常額を定め國庫より支出するものとす、皇室の事を奉掌するに、宮内省あり、宮内大臣、内大臣、宮中顧問官、侍從職、式部職、其他の諸官職あり。

政體

政體の種類

政體とは國家の主權を實行する機關組織の總體を謂ふ、國體は主權の所在に依りて定まれども、政體は主權運用の方法によりて定まる、凡そ政體は其種類を大別して二種とす、

立憲制度

一は主權の君主にあるものにして之を君主政體と云ひ、一は主權の人民に存するものにして之を民主政體と云ふ、君主政體は再び之を別ちて(一)立憲君主政體(二)專制君主政體とす、立憲君主政體は主權は君主にあれども主權を行ふには必ず確立の國憲に據らざるべからざるの制なり、重もなる文明國は概ね此制を採る、英吉利、獨逸、奧地利の如き是なり、專制君主政體は君主一人にして萬機を獨裁專行するの制にして、君意即ち國法となり、君主の威權には敢て制限あることなし、此制を採るは露西亞、清、韓の如き是なり、民主政體は或は之を共和政體と稱し又二種あり(一)は國民の全體直に主權を行ふ直接民政にして瑞西の如き是なり、(二)は國民の一部分主權を行ふ代議民政にして北米合衆國、南米諸

共和政體

政府

國の如き是なり、以上各政體の中我日本帝國は實に立憲君主政體を採るの國なりとす。

君主は國家の大權を行使する特權あれども、之を有効に活動せしめんとするときは必ずや政府なる機關を経由せざるべからず、故に我帝國憲法の所謂政府なるものは君主大權の作用を掌る所の官府を云ふ。

大日本帝國憲法

憲法 國家の組織及國權の作用を規定せる法規を總稱して憲法と稱す、大日本帝國憲法參看、我大日本帝國憲法は實に明治二十二年二月十一日を以て之を發布せられたり、惟みるに斯る盛典は東洋諸國に於て絶て其例を見ざる所に於て、我帝國實に東洋に於て此政體の基を開きたり、抑我國に於て憲法の發布を見るに至りしもの決して偶然の事に

立憲の由來

あらざるなり、其由來を原ぬれば、遠く皇祖皇宗開國の旨に出づるものにして、我叡聖なる天皇陛下は、夙に大御心を爰に注がせ給ひ、維新の初より屢、聖旨を垂れさせられ、今日我臣民開發の時に及んで始めて之を公布せられたるものなり、今遡りて聖旨を仰げば、慶應三年十二月の御沙汰に曰（前）『神武創業の初に原づき、縉紳武辨堂上地下の別なく、至當の公議を竭し、天下と休戚を同くし云々』續て翌年三月に至りては、五條の御誓文を發せられ、其第一條に『廣く會議を興し、萬機公論に決すべし』と、又明治八年四月の詔勅に曰（前）『朕今誓文の意を擴充し、茲に元老院を設け以て立法の源を廣め、大審院を置き以て審判の權を鞏くし、又地方官を召集し、以て民情を通じ、公益を圖り、漸次に國家立憲の政體を立て汝

各國立憲の由來の差異

衆庶と俱に其慶に頼らんと欲す云々と詔らせられしは、即ち帝國憲法の由來にして、實に皆叡慮に出たるなることは、憲法發布の詔勅及大日本帝國憲法により、明示せられたる處によりて知るべし。

抑、憲法は世界の文明國は既に確立せりと雖、各國の歴史上よりして其立憲制を建てし事情種々にして各等しからず、或は人民王家に迫りて強請せし國あり、或は王家衰亡して政權終に庶民の手に歸せし國あり、然るに我日本の立憲制を建つるに至りし原因は、以上各國の沿革とは全く異なり、唯維新の初年天皇親ら誓はせられたる勅諭により、有志の士朝廷に獻替し遂に明治十四年十月十四日の詔勅を以て大憲煥發の事を定められしに基く、故に我國立憲の制度は、

立憲と日本
地形

陛下が我國の成立定例に則り、宇内の例を參酌採納し給ひて、與へられたる政權たるに外ならず。

斯の如く我帝國憲法が他の立憲諸外國に異なりたる範例を開きしものは、固より祖宗の國を肇められし威靈と、列聖の英武と、我臣民の忠實とによる結果なりと雖、其大源を尋ぬれば我帝國地形が一種特別なりしによる、總て大陸各地は人種の混同實に甚しくして、多きは七八種、少きは二三種の民族相混同して一國を成せり、隨つて其氣質風習感情等亦區々にして假令外國に對しては自國を愛する念あるも、其一國內に於ける感情は到底同き事能はず、故に唯單純なる一片の理論を以て國是とするが故に、其極遂に一種の民族一時の勢力を得れば之を以て國是とし、或は王權を斷絶

民種の異同
と政治の巡

日本臣民

し、或は王家に迫て強請するに至る、大陸諸國に起る争端は概ね人種と人種との競争にあらざるもの鮮し、斯の如く大陸の人種に混合あるものは固より其地形に基づく處にして、各國陸土相通じ、人種の移轉自在にして其の交通を妨げざればなり、其餘波英國の如き島地と雖、亦免るゝこと能はざりし。

我帝國の人種は太初より單一なりと云ふにあらざれども、國民皆久しく列聖威徳の下に服して日本臣民たる資格に於ては打ちて一丸となしたるに異ならず、今日に於て既に人種の判別なきが如く業已に日本民族と化し去れり、彼の蕃族と稱する歸化人も固より少數にして、日本民族を動すに足らずして、入國以來は盡く大和風に化せられ、利害を同

外國人の奇評

ふするの民たるに至り、普天率土皆王臣王土にして、他の外國とは君臣の關係に於て全く特別なる理由あるなり。以上記するが如く、我國に立憲政治の新制度を建設せらるるに至りしは、一朝一夕の事にあらず、實に我國歴史のより東洋率先國として我帝國が立憲制度を採用せしは當に然るべき所なり、然るに未だ我の進歩を信ぜざりし歐米人等は、新交際國が一躍立憲制度を建設せるを見て、其當時之を評して、是れ黄色人種が立憲政治に適するや否の試験なり、東洋に於ける文明制度の實驗場なりと言へり、甚しきは地震國は地變力の猛烈なるが爲め、其人民は一般に氣輕にして、忍耐遠慮に乏しく、到底立憲制度の如き責任を重ざる制度には適せず、杯と妄評する者ありき、我國民たるもの猛省奮勵して、憲政有終の美を濟し、地震國も尙代議制度を行ふに、適せざることをなし、との反證を示さるべからず。

立法制

帝國議會

我國の立法制は憲法の定むる所により、明治二十三年以來帝國議會を開設して、立法府とせらる、帝國議會は、貴族院、衆議院の二局より成立し、我邦一切の法律は凡て帝國議會の協賛を要し、毎年東京に召集せられ、三箇月の會期を以て開會す。

貴族員

貴族院の組織は皇族、華族及勅任せられたる議員より成り、其制は(一)皇族の男子成年(滿二十歲)に達せられたる者、(二)公侯爵を有し、滿二十五歲に達したる者、(三)伯子男爵を有し、滿

二十五年に達し各同爵の選に當たりたる者は七ヶ年の任期を以て議員となる(四)國家に勳勞あり又は學識ある滿三十歳以上の男子にして勅任せられたる者は終身議員となる(五)各府縣に於て滿三十歳以上の男子にして土地或は工業商業に付多額の直接國税を納むる者十五人の中より一人を互選し其選に當り勅任せられたる者は七ヶ年の任期を以て議員たり。

貴族院は以上五種の議員を以て組織し其數總て四百二十人あり。

衆議院の組織は各府縣の選舉區に於て選舉したる議員を以て成る而して其選舉人の資格は(一)帝國臣民の男子にして年齡滿二十五歳以上の者(二)選舉人名簿調製の期日より

衆議院選舉區議員

前滿一年以上其の府縣内に住所を有し仍引續き有する者(三)選舉人名簿調製の期日より滿一年以上地租十圓以上又滿二年以上地租外の直接國税十圓以上若くは地租と其他の直接國税とを通して十圓以上を納め仍引續き納むる者とす被選舉人の資格は(一)帝國臣民の滿三十歳以上の男子たる者は被選權あり但し禁治産者破産者公權剝奪者禁錮以上の刑の宣告を受け裁判の確定せざる者等は被選權を有せず衆議院議員の選舉區は各府縣を以て選舉區とし人口五萬以上を有する市は別に一選舉區とし議員は一府縣より二人(沖繩)乃至十六人(東京)を出し其數總て三百六十人を出す。

政黨
參政權

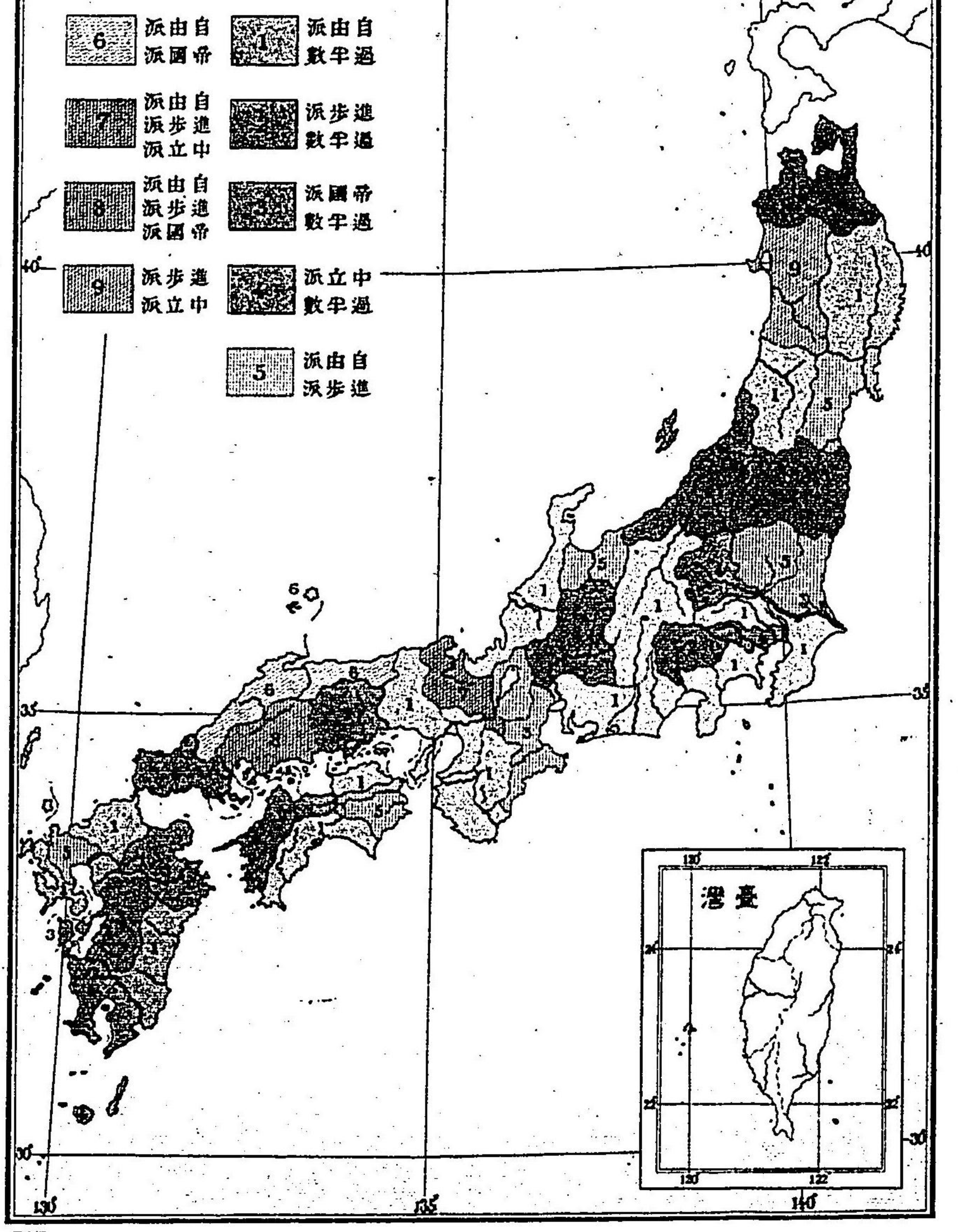
政黨 上來述べたるが如く、國政は既に立憲制度に改められ、國民をして政事に參與すべき權利、即ち參政權を與へられたるに就ては、各政治に對する思想を發表し、以て政見を同ふする者、互に相團結して、其理想を實行せんとす、かゝる團體を指して政黨と言ひ、又は政派とも言ふ。

自由派
進歩派
帝國派

我國の政黨は種々の經歷を以て現今に至り、或は二十餘派に分離せし時あり、或は一大政黨に網羅せられんとせし時あり、互に消長變遷あり、從つて種様の名稱の下に集まりたれども、而かも最も經歷を有し、最も鞏固なるは、板垣伯(退助)の率ゐし自由派と、大隈伯(重信)を領袖とせる進歩派、及佐々友房氏等の率ゆる帝國派の三大政黨にして、其他は中立派と稱すべし、最近に至り自由派及中立派の一部其他とによ

大日本帝國

政治分佈圖



り伊藤侯(博文)を首領とせる立憲政友會起れり、今右四大派に就て、明治三十二年府縣會議員總撰舉の成績に徴して之を觀るに、三府三十七縣に於ける府縣會議員總數一千六百七十六名の内、其黨派別は左の如し。

自由派	七七一	進歩派	五二一
帝國派	一二二	中立派	二七二

即ち府縣會議員の數に於ては、自由派最も多く、殆ど全數の半を占め、進歩派之に次ぎて、全數の三分の一弱を有せり、帝國派は全數の四分の一強を有し、中立派は全數の六分の一に當る、故に尙之を約すれば、畧七五三一の割合となる、而して各政派分野の景況は、自由派の過半數を占むるは、大阪、神奈川、兵庫、長崎、埼玉、千葉、奈良、愛知、静岡、長野、岩手、山形、福井、

各政派の地方的配布

石川、和歌山、香川、福岡、宮崎、高知の一府十八縣に亘れり、進歩派の過半數を占むるは、新潟、山梨、岐阜、福島、青森、岡山、愛媛の七縣にして、帝國派の過半數を占むるは、熊本、大分の兩縣なり、又中立派の過半數を占むるは、東京、群馬、山口、鹿兒島の一府三縣なり、而して茨城、栃木、滋賀、宮城、富山、徳島、佐賀、三重の各縣に於ては、自由派、進歩派、交、あれども共に過半數に及ばず、鳥取、島根の兩縣は、自由派、帝國派之を兩分し、秋田は進歩派及中立派にして、京都は自由、進歩、中立の三派あり、廣島は自由、進歩、帝國の三派鼎立の勢なり、故に我國の政黨政派分野の地方的配布の狀より觀れば、頗る混同して別に地方的系統を有せざるが如し、然れども之を概括すれば、自由派は近畿、東海道に多く、進歩派は稍、東北に多き傾きあり、帝國派

各政派の代議士數

は九州を根據として稍、中國に分布せり、詳細は政派分布圖に就て觀るべし。

衆議院議員政派別に就き、其筋の人の調査せる處に據れば、全國に於ける衆議院議員撰擧者總數は七十九萬六千五百餘票にして、今之を各派の勢力に對照し、票數を區別すれば左の成績を得べしと云ふ。(明治三十三年改正の新撰擧法實行の豫想)

- 政友會(自由派) 三十一萬五千七百四十五票
- 進歩派 二十一萬八千四百八十七票
- 帝國派 七萬七千二百六十二票
- 中立派 十八萬五千八十四票

而してこの各政派投票數より撰出せらるべき各派の議員數は、左の如くなるべしと云ふ。

代議士の職
業別

政友會(自由派)	百四十四
進歩派	一百
帝國派	三十五
中立派	八十四

又第十五議會に於ける衆議院の職業別を示せば左の如し。

農業	一三〇	會社員	二六
辯護士	二三	新聞記者	六
商人	三〇	醫者	三
官公吏	一二	無職雜業	七〇

故に我國の代議士は農民を代表するもの最も多く、全數の四割三分を占め、次は無職又は雜業者にして、商人の如きは、僅に一割なり、又外國に於て多き工業代表者の如きは、我國

に於ては殆ど皆無なり。又衆議院議員一人に付代表數は、平均十四萬の人口を代表せり。

行政制

行政權は立法權に對する執行權にして、國家公衆の利益を經營し、損害を除くために法律を運轉活動し、併せて之に關する命令及細則を發するの權あり、故に國際條約の事に關し、府縣郡市町村等の地方政を監督管理するの責務あり、其機關を政府と謂ふ、政府は大權の作用を掌る所の官府を總稱す。

政府の中樞は之を内閣と稱し、内閣總理大臣を首班とし、外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信の各大臣あり之

國務大臣

政府

を國務大臣と云ひ天皇を輔弼し其責に任し、法律命令其他國務に關する詔勅に副署す、又各省の政務を分掌す、各省には大臣の下に總務長官、官房長、局長、參事官、秘書官、書記官、屬等の職員あり、總務長官は命を大臣に承け省務を整理し、各局課の事務を監督し、局長は大臣又は總務長官の諮詢に應じ意見を具へ及審議立案を掌る、其他は各庶務に従事するの制とす。

内閣

内閣は國務大臣を以て組織し、内閣總理大臣之れが首班となり、機務を奏宣し旨を承けて行政各部の統一を保持す、凡そ法律及一般の行政に係る勅令は、内閣總理大臣及主任大臣之に副署し、勅令の各省專任の行政事務に屬する者は主任の各省大臣之に副署す、又閣議を経る各件は下の

如し(一)法律案及豫算決算(二)外國條約及重要なる國際條件(三)官制又は規則及法律施行に係る勅令(四)諸省の間主管權限の爭議(五)天皇より下付せられ又は帝國議會より送致する人民の請願(六)豫算外の支出(七)勅任官の任命及進退、其他各省主任の事務に付き、高等行政に係りし事體稍重き者は總て閣議を経るものとせり、内閣所屬の諸局は賞勳局、法制局、恩給局なり。

外務省

外務省は外國に對する政略の施行、及外國に於ける我國貿易の保護に關する事務を管理し、交際官及領事を監督す、而して政務局、通商局、公使館、領事館之に屬す。

内務省

内務省は地方行政、警察、監獄、土木、衛生、地理、社寺、出版、版權、戶籍、賑恤、救濟に關する事務を管理し、中央衛生會